

第3章 奈留島の歴史・沿革

第1節 五島市及び奈留島の歴史

(1) 原始・古代

①旧石器時代～古墳時代

長崎県教育委員会が発行した「長崎県遺跡地図」によれば、下五島地域で旧石器時代の遺跡 9、縄文時代の遺跡 77、弥生時代の遺跡 19、古墳時代の遺跡 7 が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。五島における遺跡の立地的特性として、海岸部に集中することがあげられる。特に縄文、弥生時代の遺跡はほとんどが海岸部か、かつて海岸であった場所に所在し、出土遺物は漁労生活に関わる遺物が大半を占め、稲作農耕社会となった弥生時代においても漁労の伝統が強く残り、新しい稲作社会への転換はあまり見られなかったものと思われる。これは、現在の下五島地域では内陸部に集落が少なく、主要な集落が海岸部にあるのは古くから海に依存した生活が続いてきたためであろう。また、縄文時代の遺跡では、明確な集落遺構が検出されておらず、数世代にわたっての定住ではなく、よりよい生活環境を求めて移住を繰り返したものと思われる。

出土遺物から類推すると、全体として九州本土と同じような出土遺物組成を持ち、文化圏としては西北九州文化圏の範囲内である。しかし一方で、南九州系の土器も出土しており、九州本土部との広範囲にわたる海を通じた交流がうかがえる。

遺跡の数は弥生時代後期から漸減し、古墳時代になると遺跡の数は激減する。古墳時代を特徴付ける遺跡・遺構である古墳（高塚式墳墓）も五島列島地域では、小値賀島に2基が確認されているに過ぎない。

②古代

五島列島地域が文献に登場するのは、「古事記」「肥前国風土記」に記述されたのが最初である。古事記上巻の国生みの章には、大八島を生んだ後「・・次に知訶島ちかしまを生みき。亦の名を天之忍男という。・・」という記述があり、この知訶島が五島列島地域を指すと言われている。なぜ知訶島と呼ばれるのかは、肥前国風土記の中で、景行天皇九州巡行の際、志式島（平戸）に立ち寄ったところ、西海を望むと海の彼方に煙が立ち上っているのを見て「この島は遠しといえども、なお近きが如く見ゆ。近島というべし」と言ったことに由来するという。

五島列島地域が歴史の表舞台に登場するのは、遣唐使派遣時代になってからである。当初、遣唐使船の航路は九州北部を発し、壱岐、対馬へと渡り、朝鮮半島沿いに寄港しながら大陸へ渡る北路がとられていたが、朝鮮半島を巡る国際情勢が悪化したため、九州北部から五島列島地域へ渡り、島伝いに寄港しながら一気に大陸へと渡る南路がとられるようになった。肥前国風土記にも、「…西に船の泊まるところが2カ所あって、一つを相子田あいこたの停とまりといい二十艘余りの船を泊めることができ、一つは川原の浦といひ十艘余りの船を泊めることができる。遣唐使

はこの港から出発して、川原の浦の西にある美弥良久の埼を経て西を指して海を渡る。…」と記述されており、このうち相子田の泊が現在の新上五島町青方（相河）、川原の浦が五島市岐宿町の白石湾（川原郷）、美弥良久の埼が五島市三井楽町の柏崎に比定されている。

遣唐使船の寄港地となり、五島列島は日本と大陸との交易・往来の中継基地として利用されることになっていった。中央政権においても、五島列島地域の地理的重要性が強く認識されるようになり、「日本三代実録」には、貞観18年（876）大宰権師在原行平の建議により、肥前国松浦郡庇羅（平戸）、値嘉（五島）の二郷をあわせて上近、下近の二郡とし、値嘉嶋を設置。肥前国から分離・独立させることを認めたことが記されている。この場合の嶋とは、壱岐嶋、対馬嶋と同じく国に準ずる行政体を意味する。値嘉嶋を設置した理由は、この地域は特産物を多く産出するが、あまりにも広大であるため官吏の目が行き届かず、在地の郡司らが私的な搾取を行っているため、厳しく取り締まる必要があること。また、大陸や朝鮮半島に近く、交易航路の要所であり、貞観11年（869）には新羅の海賊が九州沿岸に襲来した際この地を経由していることから、国防を充実させなければならないこと。さらには、交易の際立ち寄る唐の商人達が、勝手に地元の特産物などを安価で手に入れ多大な利益を得ていると指摘、このことからこの地の支配を徹底すべきと論じている。

しかしながら、値嘉嶋の設置については承認されたもののその後に編纂された延喜式には、値嘉嶋や上近・下近の郡名は見えない。設置はされたものの、それほど長続きせず、やがて旧態に復されたものと思われる。

同時期の中央から見た五島列島地域に対する認識を示すものとして、貞観儀式（875）大饗の祭文があげられる。大饗の祭文とは、平安時代における疫鬼を宮中及び日本国内から追い払う追饗の儀式で読み上げられた呪文（祝詞）である。そこには疫鬼を都及び日本の千里の外に追放するのに、日本境界の四方「東方の陸奥、西方の遠値嘉、南方の土佐、北方の佐渡」より遠いところにせよとなっている。このことはつまり、当時の日本（少なくとも都）では日本の西の果てが遠値嘉（五島列島地域）であると考えられていたことを物語るものである。

10世紀代については、歴史上空白の時期で、文献あるいは遺跡の出土遺物からもあまり知られていない。この時期、周辺諸国の情勢は激動の時代を迎えており、中国では唐が滅亡し、五代十国を経て宋が建国され、朝鮮半島では新羅が滅亡し、高麗が建国される。一方日本においては、律令体制が崩壊し、各地で荘園が形成されていき、地方豪族が台頭してくる頃である。長崎においても各地に寄進地系の荘園が成立し、五島地域は宇野御厨の一部に組み込まれている。

10世紀中葉の都においては、天皇親政による政治が執り行われ、遣唐使廃止に伴う大陸文化の流入が止んだため、それらを昇華するかたちで国風文化が華開いていた。特に文学では、古今和歌集などの勅撰和歌集、源氏物語に代表される物語、土佐日記、枕草子などの日記・随筆が書かれ、国風文化の一翼を担った。その中で、代表的な日記文学である「蜻蛉日記」（作者は右大将藤原道綱の母）に五島列島地域に関することが以下のように書かれている。

「この亡くなりぬる人のあらはに見ゆるところなんある。さて近く寄れば消え失せぬなり。遠うては見ゆるなり。」

「いずれの国とや。」

「みみらくの島となむいふける。」

などと仏僧たちが語るのを聞いた道綱の母が、亡き母を偲んで、

ありとだに よそにても見む名にし負はば

われに聞かせよ みみらくのしま

と嘆き悲しむと、兄がそれを聞いて泣きながら、

いずことか 音にのみ聞くみみらくの

島がくれにし人をたづねむ

と返歌した。

また時代は下るが、大治3年(1128)頃に編まれた源俊頼の家集「散木奇歌集」には、

みみらくの わが日のもとの島ならば

けふも御影にあはましものを

と書かれており、この「みみらく」という場所が、五島列島最南部に位置する福江島の三井楽地区を指すものと考えられる。この和歌から読み取れる五島列島地域(三井楽)のイメージとして異国か日本の地か曖昧な場所であり、日本の西の果て＝異国との境界上にある島と認識されつつも、当時広まりつつあった浄土教の西方浄土思想と相まり、死者に会える島とイメージされるようになったと思われる。

いずれにしても、当時の都にいる貴族にとって五島列島地域は上記のような日本最果ての地、異国との境界上に浮かぶおぼろげな島「国境をまたぐ島」としてイメージされており、そこには国防あるいは交易上の重要な地としての値嘉嶋という認識はもはや感じられない。遣唐使廃止から僅かの際に、五島列島地域に対してのイメージが大きく変容したことが伺い知れる。

11世紀代になると、出土遺物の中に貿易陶磁器が検出されるようになる。この時期は、日宋間による私貿易が活発化していく時期であり、平氏政権が成立すると平清盛により正式な国家間の貿易として確立され、隆盛を迎える。この交易航路のルート上に五島地域が位置しており、交易船の寄港地として利用されたことは想像に難くない。

(2) 中世～近世

① 中世

中世という時代を武家政権による支配の開始と位置づけるなら、五島における中世は、文治3年(1186)に始まると言えよう。この年、宇久家盛が五島列島地域の最北端島である宇久島に上陸し、五島列島地域の支配体制を確立し始めた。宇久家盛の由来は諸説あるが、一説には、治承・寿永の乱(いわゆる源平の戦い)を逃れた平家盛(平清盛の実弟)が、宇久島に上陸、在地の豪族に請われ五島の在地領主となり、上陸した地に因み宇久家盛と改姓したという。また一

説には、宇久家盛は、逆に源氏の系譜を引く豪族で、武田左兵衛尉有義の子武田次郎信弘であり、家紋が武田菱であることがそのことを物証するものであるという。

武田次郎信弘は、平戸黒髪山麓に居を構え、のちに宇久島に渡って宇久次郎家盛と称した。鎌倉幕府に忠誠を尽くした功により、肥前守に叙せられ、代々五島列島地域を領するようになり、宇久を称するようになったと伝えられている。

いずれにしろ、宇久家盛の出自はどうかであれ、この時期に五島列島地域において地方豪族(領主)による支配体制が確立しつつあったことが伺える。同時代の歴史史料、古文書からは五島列島地域における中世前半の動きはうかがい知れないが、宇久家盛を始祖とする宇久氏(後に改姓し五島氏となる)により、支配下に組み込まれていったのであろう。

文献により、五島列島地域及び宇久氏の動きが登場してくるのは、8代目領主にあたる宇久覚が五島における支配体制をより強固なものとするため、弘和3年(1381)宇久島から五島列島最大の島である福江島に居を移したことに始まる。

当初は福江島の北部の岐宿に居を構えていたが、続く9代目の宇久勝の時、元中5年(1388)に福江に移る。福江の天津に辰ノ口城という居館を構え、五島列島各地の豪族と一揆契約(盟約に基づく政治的共同体)を結び、名実ともに五島列島の領主となっていく。また、宇久氏は平戸松浦氏を惣領とする松浦党(肥前松浦地方(平戸、五島など)を中心とした豪族の連合体)の一派となった。

この時期より、東シナ海周辺地域(主に朝鮮半島や中国沿岸)を中心に、倭寇が活発化するようになる。彼らは、ある時は私貿易を行い、交渉が決裂すると海賊行為に及び、いわば半商半海賊的な性格を帯びていた。そのような海賊行為に宇久氏を含む松浦党がどの程度まで積極的に関与していたかは、今後の調査・研究に委ねるが、倭寇の構成は主に対馬、壱岐、松浦地方から九州～瀬戸内沿岸部を拠点とする水軍集団だと考えられている。この時期は鎌倉幕府が崩壊し、建武の新政を経て室町幕府が成立したものの南北朝の動乱が収まらず、中央政権の支配力が地方まで及んでいないような状態であった。また、朝鮮半島も高麗王朝の末期にあたり、中国大陸においても強大な勢力を誇った元も権力闘争、重商主義による地域経済の疲弊等により、政権末期の様相を見せ始めていた。そうした状況の中での倭寇活動は、両地域の政権に経済的な打撃を与え、王朝崩壊を決定的なものにした。

その後日本においては、南北朝の動乱(観応の擾乱)を経て、足利義満が3代将軍となると国内の反勢力は徐々に平定され、ついには南北朝合一を実現し、朝廷の分裂という異常事態を終結させた。だが、義満は日本国内での絶対的な地位を確立するため、前代の元王朝を打倒し東アジアの大国となった明との国交正常化を図り使者を送るなどして正式な国交を成立させた。同時に朝貢貿易を開始した。歴史的にいう勘合貿易の始まりである。この勘合貿易の開始(正式な日明国交樹立)により、東シナ海沿岸を荒らし回った倭寇も日本、高麗・李氏朝鮮、明の徹底的な取締りと管理貿易により、その活動は急速に終息していく。

一方五島では、宇久氏9代目領主の宇久勝の時代、応永20年(1413)五島列島地域各地に拠点を構えていた豪族により五箇条の規約を設けた「宇久浦中契約」が成立し、宇久勝が党首

に推された。このことにより宇久氏の五島統一がなった。

徹底した管理貿易である日明、日朝貿易が開始されると貿易船が五島列島各地に寄港するようになり、遣唐使時代と同じく大陸との貿易上、重要な寄港地として認識されるようになった。幕府は、交易ルート of 安全保障を確保するために五島列島地域に居を構えていた豪族である宇久氏や奈留氏に遣明船の警護を命じている。3代将軍義満の死後、室町幕府の統治機構も再び混乱を来すようになり、幕府の目が地方に行き届かない状況に乗じて、宇久氏をはじめとした五島列島地域の豪族も（主に朝鮮半島との）独自の貿易を開始していく。李氏朝鮮の宰相であった申叔舟が日本国と琉球国について記述した歴史書「海東諸国紀」（1471年刊行）には、当時五島の豪族が李氏朝鮮との交易をしていたことが記されている。そこには、五島玉浦守源朝臣茂、五島悼大島太守源朝臣貞茂、五島太守源貞、五島日島太守藤原朝臣盛などが使を遣わしたと記述されている。これらの人物の官名に付された場所は、玉浦が福江島の玉之浦、悼大島が福江島の南沖合に浮かぶ無人島である板部島、日島が若松島の属島である日ノ島と比定されているが、これらの地域に外国との交易を行い得るような地方豪族がいたとは容易には想像できない。そこで最近議論されているのが「偽使」の存在である。偽使とは、いわゆる他人の名義を使用して李氏朝鮮との交易を行った偽の使者たちの総称である。この偽使の主な構成メンバーは対馬の領主であった宗氏と博多商人であったと推測されている。五島列島地域における上記の朝鮮通信使も、おそらく宗氏が五島列島地域内に所在する地名を使い、有りもしない官職を偽装して朝鮮王朝との通商を行ってきたものであろう。

もちろんその偽使も全てが五島列島地域内の在地豪族に無断で名義使用して通商を行っているわけではなく、当初は各地の豪族が直接通商を行っていたものが、次第に宗氏や博多商人に取って代われ、あるいは直接通商は行わず名義貸しを行い間接通商を行ってきたことも想定される。

いずれにしろ、この時期、五島列島地域の豪族（主に領主の宇久氏）が直接・間接的に大陸・半島との交易に従事し、領地経営を図っていく上で、この交易が経済的に大いに潤いを与えていたことは容易に想像できる。

その後、東アジアから東南アジアにおいて、15世紀に入ると明が海禁政策（他国との貿易を厳しく制限するいわゆる鎖国政策）を行い、また日本の室町幕府との日明貿易（勘合貿易）が途絶した事などにより倭寇（後期倭寇）による私貿易、密貿易が活発になっていった。

そうした中、天文9年（1540）、明の商人であった王直（現在の安徽省黄山市の出身で、いわゆる新安商人、徽州商人である）が、通商を求めて福江島に來航した。領主であった宇久盛定は、家臣の反乱を平定した直後で、財政的にも逼迫していたこともあり、喜んで通商を許可し、城下に居住地を与えた。これが今に残る唐人町の由来となっている。また付近には、王直ら中国人が船舶用水、飲料用水用として造ったとされる六角井（長崎県指定史跡）も残されている。

王直は平戸にも拠点移し、自ら「五峯王直」と名乗り、日本との間で私貿易を開始していく。王直はまた、天文12年（1543）の鉄砲伝来にも深く関わった人物とされ、王直らの乗るジャンク船が種子島へ漂着、同乗していたポルトガル人が日本に鉄砲を伝えたとされる。また、

豊後国の戦国大名である大友宗麟とも接触をもったと考えられている。こうして王直ら中国の商人たちは、私貿易を通して巨万の富を築き上げ、東シナ海を舞台に、一大海上勢力として君臨するようになった。彼らは時に武力を背景に交易を行っていたため、半商半海賊的な存在で、倭寇(海賊)の一派と見なされるようになり、明の官憲から厳しい取締りを受けることになる。

王直はその後、本格的に倭寇の鎮圧を開始した明に捉えられ、1556年に処刑される。また、天正16年(1588年)には豊臣秀吉により海賊停止令が出され倭寇ら海賊集団の活動は一応の収束をむかえることになっていく。

②中世末～近世

王直らが築き上げた海上ネットワークは、日本にそれまでになかった出会いを経験することになる。西洋諸国の接触であり、キリシタン文化との出会いである。

天文18年(1549)、イエズス会宣教師であったフランシスコ・ザビエルが日本での布教を目指し、鹿児島の上に上陸したことに始まった出会いは、日本に新たな文化をもたらすことになる。

五島列島地域にキリスト教が伝わったのは永禄9年(1566)のことである。領主宇久純定は、ハンセン氏病に罹患していた子息の治療のため、横瀬浦にいたトーレス神父に医師の派遣を求めた。当時西洋医師としても名高かった宣教師ルイス・アルメイダが来島することになり、日本人宣教師ロレンソ了斎も同行してきた。

城下での布教を許された後は、家臣や住民の間にも続々と洗礼を受けるものが出て、やがては教会が建設されるまでになった。そしてついには、純定の跡を継いだ宇久純堯が洗礼を受け、

五島列島地域におけるキリシタン大名の誕生となった。特に奥浦地区では、信者が増え教会も建設されるなど、領内におけるキリスト教文化の中心地となっていった。(図3-1参照)

(3) 近世

慶長8年(1603)、徳川家康が朝廷より征夷大將軍に任官され、江戸幕府が創設されると日本における近世封建体制である幕藩体制が確立された。五島列島地域の大部分も五島氏が統治する五島藩領となった。

キリシタン大名であった19代領主宇久純堯が若くして世を去ると、甥の宇久純玄が領主の座を継いだ。この時宇久純堯の異母弟である玄雅との間で跡目相続の争いが起きている。純堯自身は熱心なキリシタンであったが、死去直前にはキリシタンへ反発する家臣団との対立が次第に強まっており、純堯の死去後は、洗礼を受けていたキリシタン擁護の玄雅一派とキリスト教弾圧に転じようとする純玄一派との争いとなった。結果的には玄雅一派が敗れ、長崎へ逃れ純玄が第20代の宇久家当主となった。純玄は、豊臣秀吉の禁教政策を遵守し、領内のキリシタンを厳しく取り締まることになり、この時期の領内におけるキリシタンは停滞の様相を見せるが、朝鮮出兵の参加していたこともあり、本格的な取締りは実施できなかった。純玄は、朝鮮出兵の陣中で没したため、五島家(朝鮮出兵の折、純玄は姓を五島に改めた)家中として復帰していた玄雅が第21代の五島家当主となった。玄雅は、江戸幕府による禁教令に反し、

表向きには自身は棄教しながらも、宣教師を招き布教を許していたため、長崎と同様に禁教政策下においてもキリスト教信者は増え続け、慶長 11 年 (1606) には領内の信者数は 2300 人を超えたといわれている。

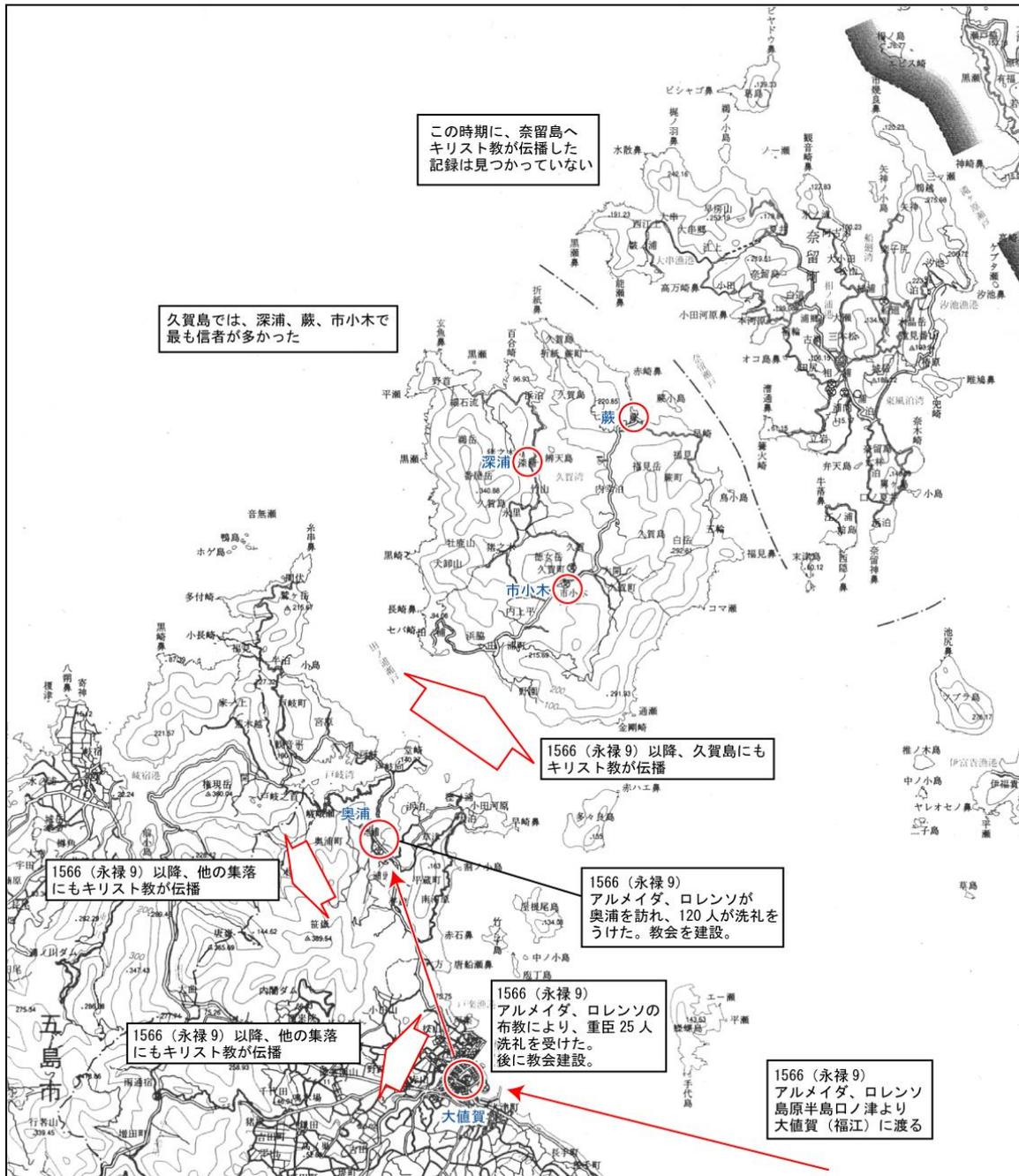


図 3-1 五島列島 (下五島) におけるキリスト教の伝播

しかし、次代を継いだ五島盛利は、継承直後に勃発したお家騒動や居城の江川城焼失という難題を乗り越え城下の統一を図るため、江戸幕府のキリスト教禁教政策に呼応し、一転して厳しい迫害・弾圧を推し進めることとなった。ために、領内からキリシタンは衰微していき、ついには壊滅状態に陥ったといわれている。

盛利はまた、領主権確立のために五島列島各地に居住していた在郷家臣団を福江城下に集住させる「福江直り」を強行した。ここに五島列島において本格的な「まちづくり(都市計画)」が始まっていくことになる。

盛利は、福江城下のまちづくりの手始めとして慶長19年(1614)に焼失した江川城に代わる居城の築城を計画する。結局藩の財政状況から本格的な城郭を築城するにはいたらず、陣屋敷を建築するにとどまった。この陣屋敷を建築するに際しては、海に面した場所、石田の浜に建設し「石田陣屋」と呼ばれるようになった。石田陣屋は、本格的な城郭のそれと比して簡易な石積みに囲まれた陣屋敷であった。石田陣屋の構築と並行して、それまで五島列島各地に領地を持ち島々に在住していた有力家臣団を石田陣屋の周辺地に強制的に移住させる「福江直り」を断行した。これは、五島列島における中央集権体制の確立を目指したものであり、近世に入り幕藩体制が確立していく過程で、五島家自体も封建的領地経営を実施していく上で、有力家臣団を直接支配下に置くことは必然的であったといえよう。

藩士177家の「福江直り」は寛永11年(1634)に完了し、その後、足軽階級の家臣を三分して、一番(弓)、二番(鉄砲)、三番(長柄)の3町を新設し、城下町の周辺に配置した。

こうして藩主自らにより開始された「福江直り」は、領内における本格的な都市計画の端緒となり、福江城下の城下町が形成されていった。

24代当主盛勝の治世、それまで幼い藩主の後見役として藩の重職にあった五島盛清(前藩主の弟)は、寛文元年(1661)後見役を辞し、五島藩76カ村のうち20カ村、石高3000石をもって富江に分知、徳川将軍家の旗本となった。そのため、五島列島地域の知行地は五島藩と旗本富江領及び平戸藩領が複雑に入り組む知行地となった。(図3-2参照)

特に中通島では、富江領の魚目と五島藩領の有川との間で捕鯨に絡む領地境争いが頻繁に起きていた。捕鯨は当時の藩財政を支える重要な産業であったので、五島藩、富江側とも慎重な姿勢を取っていたが、業を煮やした有川の漁民が直接江戸に向かい、幕府の裁定を仰ぐという状態になった。

五島列島地域における近世期の歴史的特性としては、移住があげられる。

五島列島地域近海は古くから好漁場としても知られ、特に捕鯨は「鯨1頭捕れれば、七浦潤う」といわれ、藩財政にも大きく貢献してきた。各地に鯨組が生まれたが、乱獲により資源が枯渇し、幕末には解散していった。それでも明治以後、島外資本による捕鯨会社が捕鯨基地を有していたが、終戦後まもなく撤退していった。

またキビナゴ漁は、江戸期の文献にも登場するほど古く、特に田ノ浦瀬戸に面した久賀島の田ノ浦湾や福江島北部の戸岐湾などで盛んであった。これらの漁を行う漁民集団は、主に瀬戸内地方や関西方面(主に泉州や紀州)からより良い漁場を求めて移り住んでいった。また、その

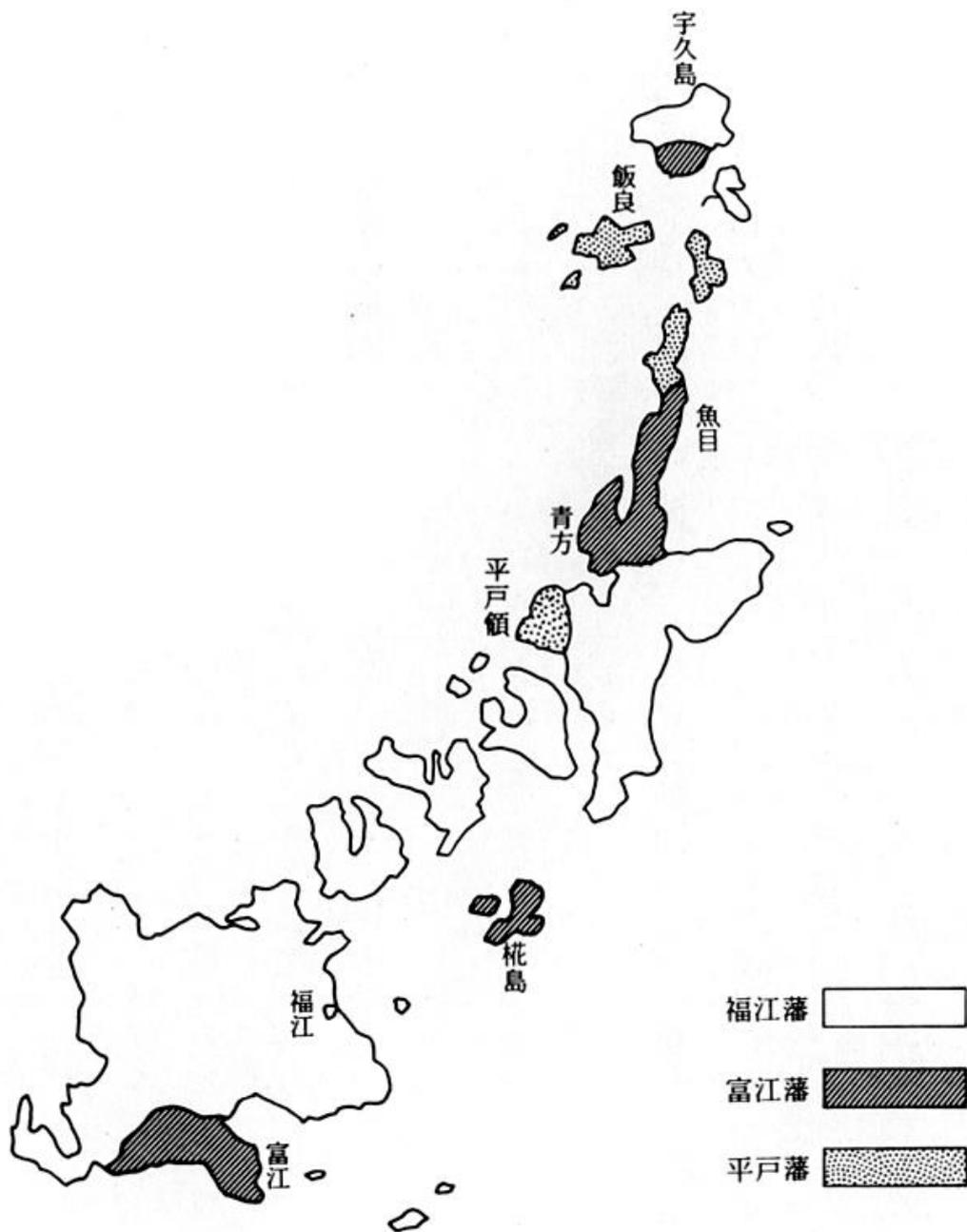


図3-2 五島列島における各藩の領地 (出典:「五島市と民俗」に加筆)

後も五島各地で移住を繰り返していったと言われている。

江戸期においての大規模な移住で特筆されるべきことは、寛政9年(1797)の大村藩領外海地方からの移住である。その頃の五島藩では、相次ぐ飢饉と主要産業であった捕鯨の不振が重なり、藩の財政は逼迫していた。そこで、幕府の寛政の改革として行われていた帰農令(商業重視から農工業重視への政策転換)に呼応するかたちで、五島藩領への移住民を募り、田畑を開墾させ石高を増やそうと計画した。一方、大村藩においては、増えすぎた人口を抑制する人口統制政策を執っており、両藩の思惑は合致し、五島藩は大村藩領からの開拓民を移住させる働きかけをし、寛政9年(1797)、外海地方から108名が五島へ移住した。そのほとんどが潜伏キリシタンであったといわれている。彼らは、六方(むかた)の浜に上陸した後、平蔵、黒蔵、楠原などに土地を与えられ、移住していった。移住した場所は山間の湿地帯であり、水田耕作には適さない場所だったが、開墾すれば水田耕作が可能な場所でもあった。移住した人たちに土地が与えられたことを知ると外海地方からの移住者が続々と増え、その数は3000名以上にも上ったといわれている。(図3-3参照)

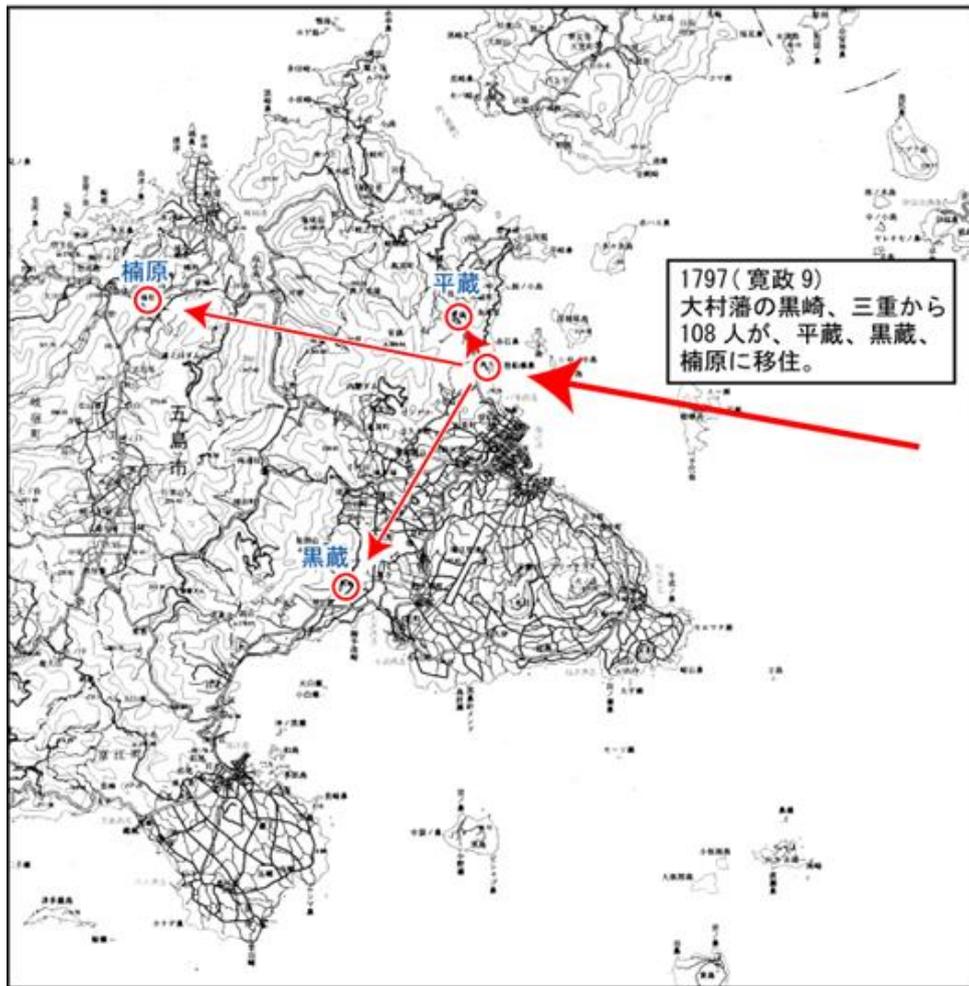


図3-3 安政9年(1797)における外海地方からの移住先

外海地域から奈留島への潜伏キリシタンの移住は、18世紀末から19世紀にかけて段階的に行われた。まず、無人島であった葛島^{かづらしま}に入り、その後、奈留島内の永遺^{ながぼえ}、椿原^{つばきはら}、南越^{なんこし}などの地域へ移住した。江上集落には、4世帯が移住したとされている。これらの移住先の多くは既存の集落から隔離された小規模な沖積地に立地し、移住した潜伏キリシタンはわずかな平地（後背湿地）を稲作地として開墾するとともに、山腹の斜面地を開墾して畑地や家屋を構え、集落を形成していった。（図3-4参照）

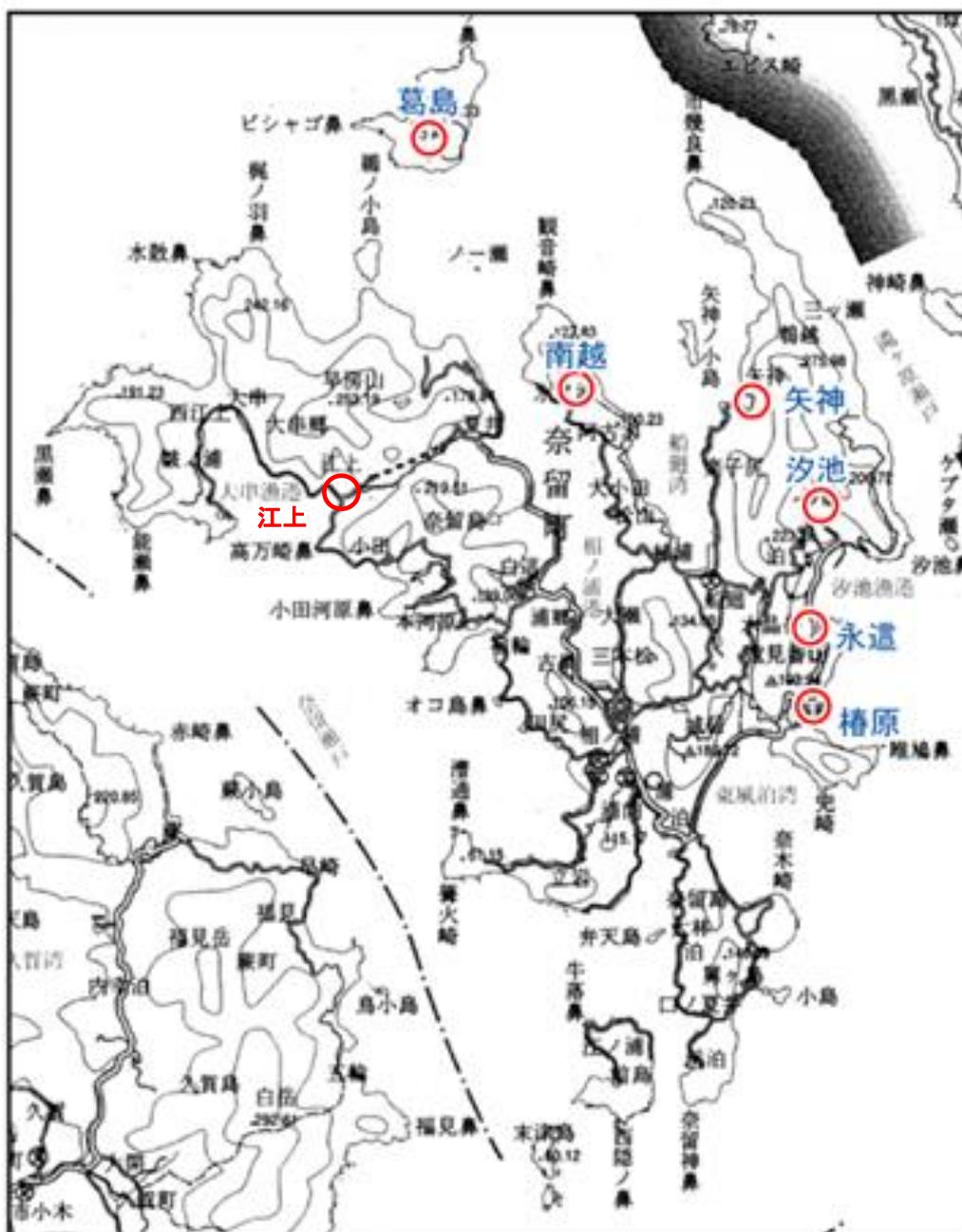


図3-4 奈留島における潜伏キリシタンの主な移住集落

(4) 奈留島の歴史

○古代～中世

「奈留」の地名は、古来「鳴（なる）」の一文字にして奈留島の南端に所在する海蝕洞穴「奈留神鼻」に波浪が打ち寄せる時に大音響が「鳴る」ことに由来し、和銅6年(713)の好字二字への地名変更の際に、「奈留」となったという。(図3-5 再掲)

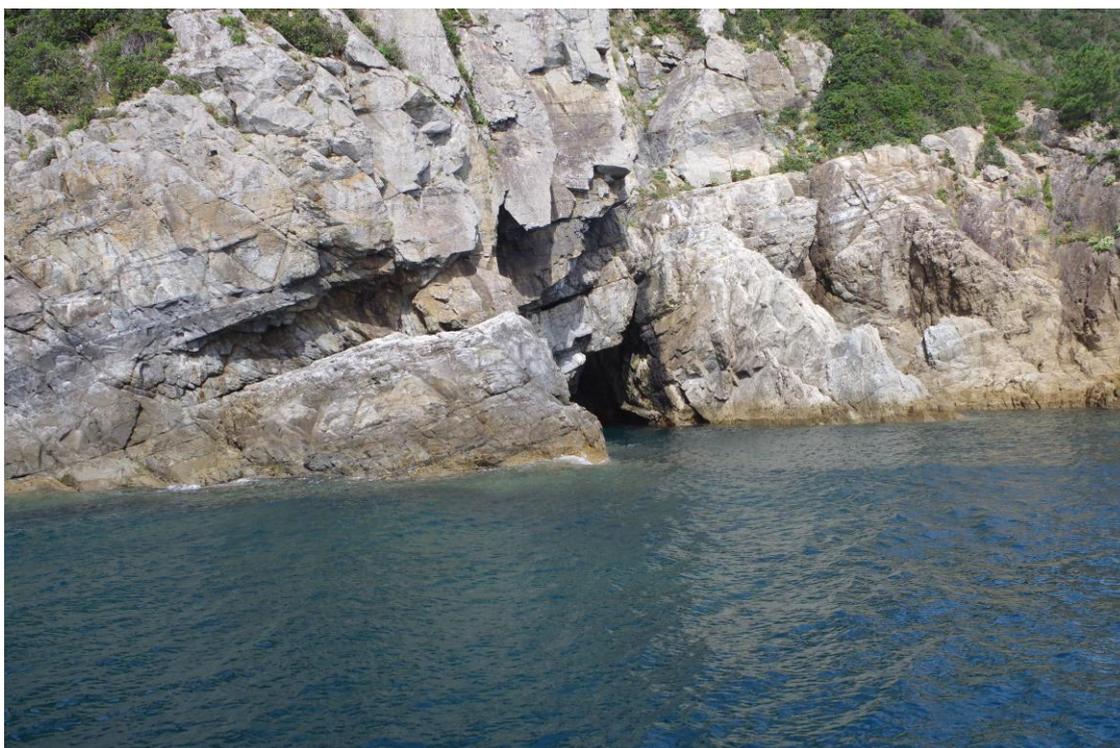


図3-5 奈留島南部の岬に立地する海蝕洞穴『奈留神鼻』

奈留島は、大陸との交易船の寄港地として知られてきた。遣唐使船の寄港地となったことで、五島列島地域は日本と大陸との交易・往来の中継基地としても利用されることになる。9世紀には頻繁に貿易船が寄港するようになり、承和9年(842)には、山科安祥寺の開山僧恵運が、唐の商人李処人の船に乗り唐へと渡っている。博多から唐へ向かう途中、値嘉嶋那留浦(奈留島)に寄港し、老朽化した船を廃棄し、島の楠を切り出し僅か3ヶ月という期間で新船を完成させ、僅か6日間で唐へと渡っている(安祥寺伽藍縁起資財帳 貞観13年)。このことはすなわち、五島列島地域において、貿易船の建造体制が整い、それに見合う技術者、労働者などの造船スタッフの充実、また、新造船(貿易船)のための資材の供給源も、ある程度島内で確保されていたことが容易に想定されるものである。この造船に従事した人々が、唐人船大工を頂点として日唐の工人、人夫、水夫などを含む国際色豊かな集団であったことは容易に想像され、唐人等の外国人や日本本土からの流入者ととも一種の開放的・国際的な居留地や業界を形成

していたことも想像されることである。

仁寿3年(853)には、入唐八家の一人として名高い円珍も、唐商人欽良暉の商船に乗り込み唐へと渡っている。往路は恵運と同じく奈留島(鳴浦と記述)に停泊、そこから東シナ海を横断し6日後に到着している。

奈留島の南に開ける浦湾の西側に鎮座する奈留神社(図3-6)は、もともと奈留神鼻の頂上に所在し、いつの頃からか現在地に遷座したという。奈留神社は交換安全を祈願する祈願所として崇敬が篤かった。室町時代になると、勘合貿易の歳遣船が立ち寄るようになり、室町幕府は奈留島を治めていた奈留氏などに勘合貿易船の警護にあたらせている。

五島藩の藩主五島氏は、参勤交代の折には、必ず奈留神社に参詣する習わしとなっていたという。奈留神社及び前面の奈留浦(奈留神鼻も含め)は、古代から中近世にかけての奈留島の往事の景観を物語る要素であると言えよう。

また、島中央部の遠見番岳山頂に所在する近世の遠見番所跡も、外国船などの警戒のために設置されたもので、奈留島が航海上の要所となっていたことを物語る歴史的要素である。

第2節の石造物調査で詳述するように、中世石塔からみた奈留島の開発は、最初に浦湾での開発が進展し、15c後半以降になると大串湾に勢力が移ったように思われる。この時期の浦湾にも在地土豪の存在が認められるが、中世石塔の基数などから考えると、浦湾よりも勢力をもった土豪の存在が大串湾では認められる。15c前半以降の大串湾は、浦湾に匹敵する海上交易の繁栄を築いたものと想定される。



図3-6 奈留神社。奈留島島民の崇敬を集め、島の総鎮守社である。

○近 世

慶長8年(1603)の幕藩体制確立により、五島藩が成立すると、奈留島は五島藩が統治する領内に組み込まれた。五島藩は、領内各地に居住していた有力家臣団を福江城下に集め、領内各地域には、代官を配置した。奈留島においても、代官が配置されているが、久賀島代官と兼務であり、このことが奈留島と久賀島が生活・生業面などで強く結びつき、近世以降、いわば同一文化圏で発展してきたとも言える

奈留島において、生業活動が確立され始めたのは、封建体制が確立した近世期に始まると言えよう。その頃の五島列島における生業活動の様相は、比較的広大な平野部を有する福江島を除き、各島では集落背後の山腹を段々畑として開拓し、前面の海において零細漁業を営む半農半漁の生業活動を行ってきた。

万治2年(1659)の奈留島での石高数は、「一百七拾八石八斗二升八匁」とあり、隣の久賀島の石高数「五百拾三石四斗七升二合」と比較して遙かに少ない。平野部が極端に少ない奈留島において、零細農業を如実に表す数字と言えよう

元禄6年(1693)の新地改めでは、奈留島が記載されていないことから、あまり開拓が進んでいないことがわかる。享保6年(1721)の新地改めでは奈留島全体で十七石余りの新地開拓が進んでいる。

安永元年(1779)の新地改めにおいては、五島藩領全体で364石2斗1合3匁の新田畑改高に対して、奈留島では5石3斗8升2合2匁の微増であり、開拓は進んでいるものの規模は小さい。以上のことから、奈留島の地形的な影響から江戸期前半を通して新地開拓は進まず、痩せ地と狭隘な耕作地による零細農業を営みつつ、小規模な漁業(沿岸漁業、魚介類採取など)を営んできたものと思慮される。

奈留島及び五島藩領全体の新地開拓の転換点となったのは、先述したように寛政9年(1797)の大村藩領外海地方からの開拓民の移住である。

寛政9年(1797)、大村藩に属する西彼杵半島西岸の外海では人口が増加し、五島藩と大村藩との協定のもとで開拓移住が行われた。開拓移住者の中には多くの潜伏キリシタンが含まれていたことから、新たに島嶼部各地に潜伏キリシタンの集落が形成された。奈留島における移住集落は、既存集落を避けるように縁辺部に築かれ、細長い半島の各所に未開拓地として残されていた小規模な沖積地へ移住し、狭隘な谷間を田畑に開拓していった。

文化9年(1806)の新地改の記録には、移住先の新たな開拓地からの収穫量が「居付分」として示されており、五島列島に移住した潜伏キリシタンによる新田開発の実態を裏付けている。奈留島内でもある程度の開拓が進み、各村の新規開拓石高に「居付」と記載されているが、新地石高数もわずかであり、各地で開拓は進んでいるものの地形的な影響から広い面積が確保できず、生業の観点から言えば、零細な半農半漁からは脱し切れてはいない。

以下、新地改に記録された新田開発により加増した石高を掲載する

文化三年 新地改

奈留村奈留村分 10石1升4合6匁 同居付 8石8升3合6匁

船廻村船廻村分 14石1斗1升7合1匁 同居付 1石3斗4升7合6匁
大串村大串村分 1石7斗9升7合4匁 同居付 1斗5升7合(江上集落か)

○近代・現代

明治に入り、キリスト教禁教の高札が撤去され、信仰の自由が訪れると、二次離島である葛島での教会堂建設を皮切りに、島内各地(江上、相ノ浦、南越)に教会堂が建設された。教会堂建設は、無形の要素(信仰)が有形の要素(教会堂)へと体現したことを示す重要な景観構成要素である。

特に江上天主堂は、奈留島で最初に建てられた教会堂であり、奈留島の近・現代史において重要な意味を持つ。まず、明治39年に、最初の簡素な木造教会堂が建設され、その後、大串集落との共同で、大串湾で行われたキビナゴ漁(地曳網漁)によって蓄えた資金を元手として、大正7年に現在の瀟洒な木造教会堂が建設された。建設にあたってのエピソードからも、単に生業に関しての重要な景観構成要素とも言えよう。

生業面に関しては、明治に入っても奈留島の生業形態に大きな変化はなく、山間の谷間を開墾した狭小な段々畑に甘藷や麦を作る農業を主とし、自家用食糧・肥料のための零細漁業や海岸に出た採藻にとどまっていた。

転機が訪れたのは明治30年代。四方を海に囲まれ、五島灘、東シナ海の好漁場を近くに持っていたため、島外人の着目するところとなり、島外資本による個人経営のイワシ網、キビナゴ地引き網が発生するに至った。個人経営の形態は紆余曲折を経て、地区を単位とする地区共同経営へと発展していった。こうして奈留島は、農業主体の半農半漁の生業形態から、カツオ漁の餌イワシの供給地である漁業の島として発展していった。

イワシ漁、キビナゴ漁と共に奈留島の漁業発展を支えてきたのが、イワシの煮干し加工産業である。各地区の共同経営として煮干し加工も進められ、集落の前面に広がる海岸に天日干し用の「ガケダナ」が作られ、当時の生業における景観要素となっていた。現在でも各集落内に当時のガケダナの名残を示す(基礎)石垣が確認できる。

特に、大串集落では、集落の南面に広がる大串湾でキビナゴ漁が盛んにおこなわれ、奈留島におけるキビナゴ漁の中心的な漁場であり、現在でも往時の地引網漁の名残を示すロクロ場の跡が残されている。このことは、隣接する久賀島の田ノ浦集落とも共通する。

イワシの煮干し加工に欠かせないのが燃料となる大量の薪炭材であるが、奈留島は山林面積も小さく山林から切り出し荒廃させてしまうと、漁場にも悪影響を与えるため、隣の島である久賀島から大量の薪炭材を買い入れていた。当時の久賀島は「久賀薪」と言われる程の薪炭材の供給地であり、イワシの煮干し加工において、奈留島と久賀島が強い繋がりがあったことがわかっている。

漁業の島として発展してきた奈留島も、昭和30年代以降の過疎化などの影響により、基幹産業である水産業(巻き網船団による沿海漁業)は衰退の一途をたどってきたが、近年五島市地域の沿岸域でクロマグロの養殖業が盛んになり、奈留島においても1事業者がクロマグロ養殖を展開している。

第2節 石造物調査

遣唐使や日明貿易の寄港地としての歴史をもつ奈留島には、それを物語る遺構が各所（夏井の井戸や海安寺跡など）で確認される。今回の調査では、造立年代が把握できる石造物に焦点をあて、奈留島の歴史的な位置を探ることを目的とした。年代が大串集落の寺屋敷石塔群など中世石塔に焦点を絞って調査をしたが、そこからは当時の奈留島が中国大陸と日本列島を結ぶ海上交通の拠点であったことが示唆されており、東シナ海を舞台に活動した中世の海人たちの姿が見えてくる。

中世（江戸時代以前）までの高速道路は近世以降の「陸上の道」ではなく「海上の道」そのものであったから、その地理的位置に恵まれた奈留島には今でいう国際的なサービスエリアが各浦々に存在していたと思われる。しかも島自体が、隣島の久賀島や日島を有する若松島同様に海岸線が複雑に入り組んで天然の良港を形成しており、「海上の道」という国際ハイウェイのサービスエリアに適した環境を有していた。したがって奈留島は、中国大陸と日本列島を結ぶ海上交通の要所としての役割が極めて大きかったと考えられる。具体的には、海安寺跡や教永寺などを抱える浦湾をはじめ寺屋敷石塔群を持つ大串湾など島内各所の湊（入り江）がそれにあたると思われる。今後の調査では貿易陶磁器など対大陸交渉の遺物や遺構がさらに確認されてくるとと思われる。

本報告では、まずに長崎県における中世の石造文化と石塔造立階層の問題について概要を述べ、そのあとに大串の寺屋敷石塔群について種目点数、素材（石材）、製作時期などを報告する。次に浦湾に属する殿口、海安寺跡、泊の平家塚、浦向の中世石塔について概要を記し、最後に中世石塔から見た奈留島の開発の歴史と大串の寺屋敷石塔群の特性を五島列島・平戸島・対馬などとの比較を通じて総括する。

石造文化

中世における石造物は、基本的にその地域で採れる石材を使用し、しかも、たとえ同じ種目の石造物であったにしても形態は地域（文化圏）ごとに微妙に異なってくる。このことから編年の一番の決め手となる形態上の特徴とその変遷は、一般に知られる中央（大和・山城）のそれに頼ることなく地域と使用石材ごとに編まなければならないことはいままでのまもない。そこに石造文化圏を設定する背景があるのだが、このような文化圏ごとの特徴は地域単位での非常に個別的な中世社会の様相が石造物を通して反映しているといっても過言ではない（註1）。

九州全域にあつて、その主な使用石材は凝灰岩（阿蘇凝灰岩）と安山岩である。とくに福岡県・大分県・宮崎県・熊本県・鹿児島県など阿蘇山周辺の地域では凝灰岩が主であり、そこからやや離れた佐賀県が凝灰岩と安山岩を併用している（註2）。

もちろん、地域によっては上記2種類以外の石材も使用している。その中で特異な中世・石造物の石材といえば、西彼杵半島産の緑色片岩であろう（註3）。長崎県側の中世・石塔類は、この西彼杵半島産の緑色片岩でほぼ全てが占められているが、現・佐賀県側の西有田や嬉野それに鹿島でも一時期西彼杵半島産の緑色片岩製塔が流入している。とくに嬉野町の湯野田緑色

片岩製板碑は鎌倉時代後半の製作で、しかも石質の面から判断して西彼杵半島産の可能性が高く、その石造学的な位置付けは非常に高い（註4）。この点は後で詳述するが、滑石製石鍋の製作と一部で重複しながら中世・石塔類の石材を供給した西彼杵半島産の緑色片岩は、関東における秩父石のように、九州さらには全国的にも特異な事例と捉えることができる。

その他、中世・石造物の地域的な石材として、鹿児島県の川辺郡などでは山川石と呼ばれる凝灰岩の一種や、また主に太宰府以北の福岡県などにあっては非常に早い段階から硬質の花崗岩が使用されている。さらに角礫凝灰岩や玄武岩、また1500年代後半以降になると各地で軟質の砂岩が使用され、製作時期と地域の状況により、その使用石材は多種多様である（註5）。

ところで、凝灰岩を使用している地域が広範囲に及ぶことは上述した通りであるが、ただ同じ凝灰岩を使用している各石造文化圏で独特の形態をもっている。例えば宮崎県の五輪塔は軒面が非常に大きくとられて他地域の五輪塔のそれとは明らかに異質であり、また熊本県（とくに菊池地方）の宝篋印塔では基礎を数段の階段状にするなど他の文化圏からは想像できない形態をもっている。さらに大分県の一地域（大野郡）では、南北朝期を中心に玄正塔と呼ばれる特異な形態をもつ宝篋印塔が知られている。このような傾向は何も凝灰岩だけに限ったことではなく他の安山岩などでも同じであり、石材は同じでも地域ごとに特色ある個性を読みとることができる。

このように中世の石造物とくに石塔類は基本的に現地またはその周辺の石材を使用しているが、各石材の石質の違いや石工技術の高低、また石工自身をもつ個性ある意匠などによって石造物の形態に微妙な差異を見せている。

このような石造文化の違いは当時の各地域での生活文化や精神文化と深く結びつき、結果的に地域の石塔として生活文化そのものに包含されていったと考えられる。そのために、例えば佐賀型の安山岩製塔の石造文化圏では基本的に他の石材使用の石塔類は建塔しないし、また西彼杵半島の緑色片岩製塔文化圏に属する人々はこれまた緑色片岩製塔のみ建塔し他の石造文化は受け入れない状況を生み出す。この点は、中世の石塔類の性格が陶磁器や銭貨などの性格と基本的に異なるところであり、それだけにその地域の石造文化とは異質な石塔類が確認される場合には、その建塔の背景に人々の移動を含めた政治的社会的な問題が想定されるのである（註6）。この点は、中世に比べより広域的な商品化が一般化してくる近世以降の石造文化とは基本的に異なるところである。

その一例として、東京都江東区亀戸の自性院に「永享七年（1435）」銘の緑泥片岩製宝篋印塔がある（註7）。銘文は基礎正面に3行にわたって陰刻されており、「悦堂／永享七乙卯／三十九」となっている。永享7年3月19日に亡くなった悦堂のための墓塔と考えられるが、永享7年の紀年銘は、製作時期を示す形態とも一致しており、当時の室町前期の石塔として間違いない。かつてこのレプリカが江戸東京博物館に展示されていたが、実はこの宝篋印塔は、その形態と石質から明らかに長崎県西彼杵半島産の緑色片岩を用い長崎県内で製作された石塔である。人間の生活文化に関係深い石塔は、その石塔自体がもつ性格からして、最初の建塔地からさらに次の遠隔の建塔地に移動し建て直すという二次的移動は、一部の例外を除いてま

ず考えられない。この点からして、この自性院塔は、15世紀前半ころに西彼杵半島産の宝篋印塔を遠路関東まで運んで建塔したものと思われる。その際、西彼杵半島産緑色片岩製塔が広域商品化されていない一地方石造文化圏内にとどまった石塔であることを考えると、自性院塔の建塔に関わる人々は多分に現長崎県に非常に関係深い人々であった可能性が高く、1400年代前半期における当地と関東との関係がこの自性院塔を通して浮上してくると考える。

なお、長崎県内にあつて1500年代後半以降、現・佐賀県側で製作された安山岩製塔（佐賀型塔）が多数建塔されてくるようになる。ただこの時期には西彼杵半島における緑色片岩製塔の製作が停止し、また佐賀型塔が大量の需要に応えられるだけの広域商品化がすでに成立していたと考えられるため、たとえ緑色片岩製塔文化圏内に佐賀型塔が建塔されていたとしても、そこには人々の移動など異質石造文化圏の影響は想定されない。

中世における石塔造立階層の変遷

中世における石造物とくに埋葬に関わる石塔類は、その建塔年代が遡ればのぼるほど、一部の上層階層に限定されてくる。この点は中央（大和・山城）と地方、九州内にあつては博多など一部の地域とそれ以外の地方で異なった表れ方をしてくるが、ここでは主に長崎県本土部の造立階層について略述したいと思う（註8）。ここで示された石塔造立階層の変遷は、嬉野町を含めた佐賀県側にあつてもほぼ同じ傾向であったと考えられる。

ところで初期の石塔造立に関しては、大きく2期に分類される。第1期が平安末から鎌倉初期、第2期が鎌倉後半から南北朝前半期にかけてである。この傾向は、単に長崎県・佐賀県内にとどまらず九州一円で確認される現象である。

第1期は、埋経（末法思想）にともなつて西暦1200年前後に造立されてくる。この背景には、12世紀九州一円に伝播が確認される熊野修験の影響が想定される（註9）。大分県の国東や臼杵などの磨崖仏などはその代表的な事例であるが、長崎県内では滑石製経筒（文治五（1189）年銘針尾・明星ヶ鼻経筒など）とほぼ同時期に、同じ滑石製の宝塔（壱岐・鉢塚長和三年銘）や笠塔婆（波佐見・東前寺など）が造立されている。また、佐賀県側では、東脊振村山霊仙寺跡の滑石製経筒や単体仏、鹿島市岩屋観音の滑石製宝塔（現・蓮巖院）、また武雄市の陽刻線描角宝塔（武雄町大字武雄）は、全国的に見ても貴重な角宝塔であり、その製作時期は鎌倉前期ころと思われるが、平安末まで範疇を広げても許される好塔である。また、北方町勇猛寺の線刻石仏も当時期の代表的な石造物である。

第2期は、1200年後半から1300年前半にかけて本格的な大型の石塔類が、これこそ突如建塔されてくる。長崎県内にあつては茸山宝篋印塔（西有家町）、田ノ平宝篋印塔（吾妻町）、野田名五輪塔（千々石町）それに平戸・大渡五輪双塔などが鎌倉後半期の石塔であるが、平戸・大渡五輪双塔を除く3基は、かつて雲仙修験に関係した四面宮に付随して建塔されており、元寇における国家鎮護・異国降伏祈祷に関係したものと思われる（註10）。佐賀県側にあつては、嬉野町の湯野田板碑・内野宝塔や東吉田五輪塔、太良町里五輪塔や竹崎観世音寺石塔群（凝灰岩製層塔や宝塔など）、東脊振村霊仙寺跡の宝塔や層塔、三田川町東妙寺宝塔、鹿島市

の蓮厳院周辺の宝塔・五輪塔や普明寺宝塔、武雄市八並の塔、白石町重盛の宝塔などがある。
以下、鎌倉後期から室町時代にかけての造立階層について概略を記す。

①鎌倉後期・南北朝（1200年代後半～1300年代後半）

造塔者は、中世有力寺院の高僧や有力名主層以上の限られた少数のクラスと考えられる。実際、造立者が限定されていることから基数は非常に少ない。またこの時期の石塔類は、有力者による造塔を裏付けるように、一般に大型塔で占められている。彫出技術は、地元製作の石塔（緑泥片岩製塔や安山岩製塔）についていえば、初期の鎌倉期のものはまだ拙ない部分もあるが、鎌倉末期から南北朝さらに室町前期になるにしたがい、次第に彫出内容は高度になってくる傾向にある。ただ、室町期になると、造立階層の拡大により次第に形態は形骸化・簡略化の傾向が表れてくる。

また、この時期の遺跡数は、限られた階層による造塔という点を裏付けるように、非常に限定される。一般的には、一地域で一カ所程度である。つまりこの早い時期の石塔類が確認される場所は、その地域にあって中世における中心地やそれに近い範囲の場所を示していると考えられるため、中世における地域の社会的様相を知る上で非常に貴重な資料を得ることができる。

②室町前期（1400年代前半）

この時期、一部の地域で複数の法名を刻んだ交名碑が確認される。ことから、階層分化の進展を背景に、造立階層が次第に拡大し、小名主層まで造塔に参加したと考えられる。この点は、遺跡数の拡大、さらには石塔自体の小型化傾向、形態の形骸化という傾向とも符合する。

長崎県にあって、この時期の交名碑が多数（5基分）確認される地域は、東彼杵地区である。また大村・萱瀬地区と佐世保市内でも、それぞれ1点ずつ確認される。この交名碑の出現は、これまでの伝統的な有力名主層が分化・崩壊して各地域に小名主が成長・独立して現在の村・郷に近づく地縁的な郷村制が成立していく過程を示していると考えられる。

ただ、この伝統的有力名主層の分化・崩壊という過程は県下全域に共通する傾向というよりも東彼杵などの一部の地域に限定された傾向のように思われる。そのため、この室町前期における造立階層は、確かに各地域に室町前期ころの石塔数が増加してくるが、ただそれまでの造立階層である中世有力寺院の高僧、有力名主層以上の限られた少数のクラスに入る階層がまだ主な造立階層であったとすべきであり、この時期から一部の地域にあって小名主層までが造立に参加できたと見るべきであろう。

③室町中期から後期（1400半ば～1500年代末）

主に室町前期ころから表れてくる石塔造立階層の拡大は、室町の後期になればなるほど顕著になり、各地に成長してくる小名主さらには役士層クラスまでもが造立に参加したと考えられる。それが室町後期に見られる小型で簡略化・画一化された粗雑な石塔類を大量に建塔した背景をなすものと思われる。

また造立階層の拡大を背景に、この時期の遺跡数・基数はより拡大し、一地域に限っても数カ所で確認されてくるようになる。

ただ、この時代であっても、造立者が上位階層のものであれば当然良質の石材を使用した大型塔を建塔している。その好例が、大村家16代大村純伊の墓塔と思われる「中庵」塔（緑泥片岩製、横幅53,0cm）である。

ところで、中世の長崎県において、明らかに庶民層による造立と考えられる石塔は、今のところ一基も確認されていない。この点は佐賀県側でも同じであるが、では、いつごろから庶民層は造立に参加できたのかと言えば、大体、江戸時代の17世紀後半以降ではないかと思われる。長崎県地域で一般庶民層が寺院に自家の葬祭を永続的に委託する習慣、つまり檀家制度が本格的に持ち込まれたのは、おそらく一般に言われる「実にかの切支丹禁圧の一方法として用いられた寺請制度の普及以後」と考えられる（註11）。このことから、一般庶民層による整形された石塔の建塔が始まったのは、多分に寺請制度普及以後の17世紀後半とくに元禄年間以降と考えられ、それを示す石塔（立石墓塔）も実際に確認される（註12）。

なお、江戸時代前半期の石塔類は、いわゆる今日の墓塔の一般的な形態をなす立石墓塔が主流を占めるようになるが、一方で五輪塔や宝篋印塔も継続して建塔される。ただ江戸期の五輪塔については、中世以来の形態を踏襲したものと、16世紀半ばから江戸期にかけて新たに登場する独特の形態をしたものに大きく分けられる。

前者は、大部分が地域の石材（主に砂岩）を使用し、粗雑な五輪塔となっている。多分に専門石工でない素人による製作と思われる。形態上は、全体に大型であるが、火輪の大きさに対して風・空輪が大きく製作され、しかもその形状は、本来の風・空輪の形状を逸脱したものとなっている。

後者の16世紀半ばから江戸期にかけて新たに登場する五輪塔は、前者以上に大型であり、いわゆる有耳五輪塔と呼ばれるものである。火輪の四隅が上方に大きく反り上がり、風・空輪も異様に大きく造られる。この有耳五輪塔は、全体の塔形は本来の五輪塔の形態から大きく逸脱したものであるが、その彫出内容から明らかに専門石工による製作であり、石材も良質のもの（当地にあっては安山岩が主）が使用されている。

奈留島の中世石塔（種目点数、素材〔石材〕、制作時期など）

奈留島の中世・石塔類は、わずか5遺構の調査結果ではあるが、西彼杵半島産の緑色片岩製と佐賀県側と考えられる安山岩製や地元産と思われる砂岩製、また一部に壱岐島の玄武岩製と思われる石塔が認められる。使用石材からみた状況は、島ならではの様相を読み取ることができる。ただ、当地における複雑かつ不透明な中世史を反映してか、わずか5遺構を遡上にあげるだけでも、その制作時期や使用石材などにおいて微妙な差異を認めることができる。

この節では、今回調査した中世石塔群について、各遺跡ごとに石材・種目・点数をあげて所見を述べる。ただし、江戸時代以降の遺品については、留意すべき遺品を除き、割愛する。

第1項 大串の寺屋敷石塔群

寺屋敷石塔群(図3-7)は、大串湾の北部、湾の最奥部に位置する大串集落の薬師堂裏手にあり、集落の東部に聳える早勝山(標高253m)のなだらかな傾斜をもったすそ野の山腹部に築かれている。現在の集落は自然堆積や後代の埋め立てなどによって形成された平地に築かれたもので、かつては薬師堂が立つ場所(早勝山のすそ野の先端部)のすぐ下まで海岸が迫っていたものと考えられる。したがって、石塔群が築かれた15~16世紀ころは湾が間近に見下ろせ、湾からも墓地が望めた環境にあったように思われる。薬師堂がいつ頃建ったのかわからないが、石塔群が築かれた時代には何らかの宗教施設か、または小規模な屋敷(館)があったのかもしれない。

現在、当墓所では五輪塔が5基分(緑色片岩製1基分、安山岩製3基分、砂岩製1基分)、宝篋印塔が5基分(緑色片岩製4基分、安山岩製1基分)、計10基分の中世石塔が確認される。その他、砂岩製の石仏(江戸後期から近代)が一個体分(2点の残欠)と細長い真砂石や当地で採取されたと思われる板状の自然石が中世石塔群の背後に立つ。これら真砂石や自然石が墓塔の意味合いをもったものなのか、または墓域を囲む結界柵なのか、それとも背後から流れ込む土砂をくい止めるための防御柵の目的で立てられたものかわからない。ただ、なかには墓塔と考えられる自然石立碑もある。



図3-7 寺屋敷石塔群(全景)

(ア) 寺屋敷石塔群の種目・石材・寸法・製作時期

各中世石塔の種目・石材・寸法（単位 cm）・製作時期については、便宜的に石塔群の右側（東南）からナンバリングをし、その順番に従って報告する（図3-8）。ただし、各石塔のほぼすべてが寄せ集めのため、種目ごとに石材、寸法、製作時期を記す。



図3-8 寺屋敷石塔群(ナンバリング)



■第1号塔 五輪塔（寄せ集め）

- 地輪 [安山岩 横幅 31,0 背高 21,0
16c前半～半ば]
- 水輪 [砂岩 横幅 26,0 背高 16,5
16c後半]
- 火輪 [安山岩 下端横幅 32,5 軒厚 4.5 背
高 15,5 上端横幅 11,0 16c前半～
半ば]



■第2号塔 五輪塔（寄せ集め）

地輪 [安山岩 横幅 31,5 背高 22,0

1 6 c 前半～半ば]

水輪 [安山岩 横幅 24,0 背高 20,0

1 6 c 前半～半ば]

※重心は下端から 14cm 上部に位置

火輪 [砂岩 下端横幅 30,0 軒厚 5,5

背高 17,5 上端横幅 10,0

1 6 c 後半]



■第3号塔 宝篋印塔（寄せ集め）

基礎 [緑色片岩 横幅下端 30,5

横幅上端 30,0 背高 16・0

階段 1 段横幅 24,3 階差 1,5

階段 2 段横幅 20,0 階差 2,3

1 6 c 前半～半ば]

塔身 [緑色片岩 横幅 12,2 背高 14,5

1 6 c 半ば～後半]

笠 [緑色片岩

下端 1 段横幅 16,3 階差 0,6

下端 2 段横幅 20,0 階差 0,5

下端 3 段横幅 23,6 階差 0,8

軒横幅 28,0 軒厚 4,5

上端 1 段横幅 23,3 階差 2,7

上端 2 段横幅 19,6 階差 0,3

上端 3 段横幅 15,7 階差 0,2

隅飾横幅 9,4 背高 3,3

軒・隅飾間 0,6 1 6 c 半ば～後半]



■第4号塔 宝篋印塔（寄せ集め）

一段目基礎〔綠色片岩 横幅 29,0 背高 14,0 階段1段横幅 25,0 階差 1,2 階段2段横幅 21,0 階差 1,2 階段3段横幅 17,5 階差 0,6 16c前半～半ば〕

二段目基礎〔綠色片岩 横幅下端 26,0 横幅上端 24,5 背高 19,4 階段1段横幅 19,5 階差 1,2 階段2段横幅 16,0 階差 1,3 16c半ば〕

笠〔綠色片岩

下端1段横幅 13,7 階差 1,2

下端2段横幅 17,0 階差 1,2

軒横幅 21,0 軒厚 4,0

上端1段横幅 17,0 階差 2,5

上端2段横幅 13,5 階差 1,2

上端3段横幅 11,5 階差 1,3

飾横幅 6,5 背高 2,3

軒・隅飾間 0,4 16c前半～半ば〕



■第5号塔 五輪塔（一具の可能性高い）

地輪〔安山岩 横幅 26,5 背高 17,5 15c後半～16c前半〕

水輪〔安山岩 横幅 20,5 背高 18,5 15c後半～16c前半〕

火輪〔安山岩 下端横幅 28,5 軒厚 3,6 背高 13,0 上端横幅 10,5 15c後半～16c前半〕

※上端ほぞ穴は円筒形

風空輪〔安山岩 風輪最大横幅 11,5 風輪下端幅 10,0 ほぞ幅 7,0 風輪背高 6,6 全背高 15,3 15c後半～16c前半〕



■第6号塔 宝篋印塔（寄せ集め）

基礎〔安山岩 横幅 25,2 背高 17,0

階段1段横幅 22,3 階差 2,0

階段2段横幅 18,0 階差 2,0

16c前半〕

塔身〔安山岩 横幅 14,2 現背高 10,0

（上部欠損）16c前半～半ば〕



■第7号塔 宝篋印塔

基礎〔緑色片岩 横幅 26,0

背高 16,3

階段1段横幅 21,0 階差 2,0

階段2段横幅 17,2 階差 2,2

16c前半～半ば〕



■第8号塔 宝篋印塔

相輪（2個分の残欠 安山岩

15c後半～16c前半）

残欠下端部〔下端円形ほぞ幅8,0

ほぞ背高3,5 下部請座以降の現背高

20,0 擦部間隔1,2〕

残欠上端部（上部請座・宝珠）

〔現背高15,5 宝珠横幅9,5

宝珠背高6,5〕



■第9号塔 五輪塔

地輪〔緑色片岩

横幅22,5 背高5,5

上端1段横幅18,5

階差0,3

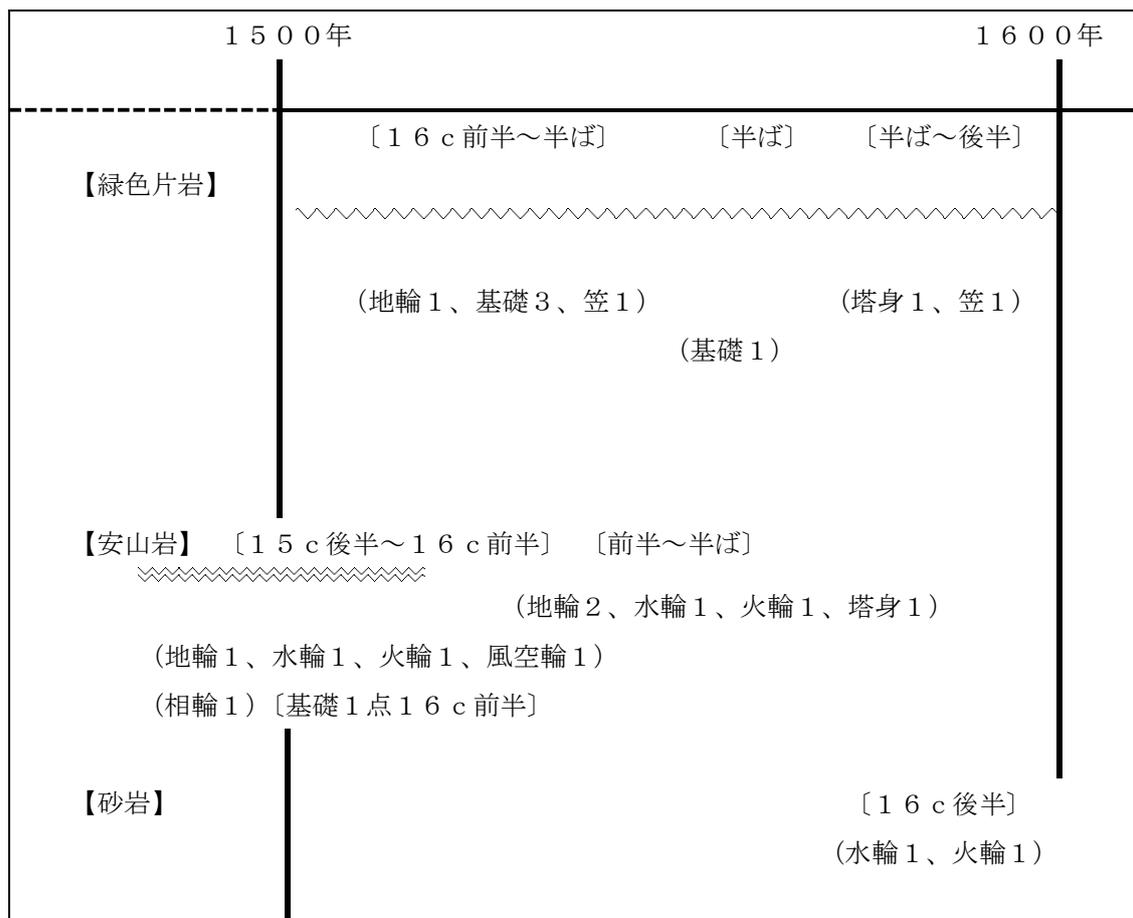
16c前半～半ば〕

■第10号塔 五輪塔（石塔間に挟まれ画像なし）

火輪 [安山岩 下端横幅 32,0 軒厚 4,0 背高 10,5 上端横幅 9,5 15 c 後半～16 c 前半]

(イ) 所見

当遺構では約10基分の中世石塔が確認されるが、その編年を表で示すと下記のようなになる。



この形式編年表からわかるように、寺屋敷石塔群は、まず15 c 後半から16 c 前半にかけての安山岩製塔（五輪塔1基分、宝篋印塔1基分）の建塔から始まり、16 c 前半期の宝篋印塔1基分、続いて16 c 前半から半ばまで続く。最初の15 c 後半から16 c 前半に想定される石塔群はおそらく大串湾を基点にした最初の勢力者に関わる墓塔と想定されるが、16 c 半ばまですべて安山岩製であり、その石材及び形態上の特徴から佐賀型と呼ばれるものである。この点から、大串湾を拠点にした初期の勢力は現在の佐賀県側と深い関係があったことが示唆されている。また、15 c 後半から16 c 半ばまでの安山岩製塔はその建塔種目が宝篋印塔2基分に対し五輪塔が3基分となっており、ほぼ半々とはいえ、傾向としては五輪塔を軸に建塔されていることがわかる。

次に16 c 前半から後半にかけてみると、これまでの安山岩製塔と重複しながら緑色片岩製

塔が建塔されてくる。この緑色片岩製塔は、いうまでもなく現在の西彼杵半島産であり、長崎県内にあつては中世石塔の一般的な石材である（註13）。16c前半から半ばにかけては安山岩製塔と緑色片岩製塔が重複しながらも、16c半ば以降は緑色片岩製塔に変化し、しかも建塔種目の主体も五輪塔（1基分）から宝篋印塔（5基分）に変化している。このことは、16c前半から半ばにかけて建塔した勢力者に何らかの変化が起こっていたことを示唆している。

この寺屋敷石塔群の建塔者は、大串湾を拠点にした中世の在地土豪であつたことは間違いなく、おそらく同族による一族墓と考えられる。しかも、その経済活動の主体は海上を主舞台にした広範囲な交流ネットワークを駆使した交易にあつたと思われる。そのため16c前半から半ばにかけての変化は、その交流ネットワークの対象地が変化したために起こった現象かもしれない。

この寺屋敷石塔群は、現段階では奈留島西海岸部における最大の石塔群であり、その資産的価値は高いと考える。

第2項 その他の中世・石塔群

1) 殿口の五輪塔

浦湾最奥の殿口に寄せ集めの五輪塔がある。現状は地輪、塔身、火輪、風空輪の4石彫成からなるが、現状の地輪と風空輪はともに16c前半から半ばの部材であり一具の可能性はある。



また塔身とした四角石柱は、上端が欠損していることもあり、宝篋印塔の塔身なのか五輪塔の地輪に相当するのかわかには判断できないが、残欠の彫成された側面から考えると五輪塔地輪の可能性が高く、16c半ばころの製作と思われる。

ただ、この殿口の五輪塔で極めて重要な部材は火輪であり、現段階では奈留島で最古の石塔である。そのため当遺品についてのみ寸法（単位cm）を報告し、所見で製作時期などについて報告する。

(7) 種目・寸法

■五輪塔火輪

火輪〔下端横幅 37,7 背高 23,5

〔うち軒厚が 5,0〕 上端横幅 17,5〕

〔上端円形ほぞ穴径 9,0 深さ 6,0〕

制作時期：14c前半～半ば（鎌倉末～南北朝前期）

(イ) 所見

殿口火輪の最大の特徴は、4側面（屋根）に種子ラの四転（東面ラ・南面ラー・西面ラン・北面ラク）を薬研彫りで大振りに陰刻されている点にある（拓本画像 1・2・3・4）。種子ラの字体を事例にあげると、字体の最大横幅が7,5cmに対し高さが14,5cmもあり、軒厚を除く火輪の背高18,5cmの屋根面いっばいに縦長に陰刻され、しかも陰刻断面が逆三角をなす薬研彫りで深く彫り込まれている。ただ、火輪自体の形態が、最大横幅（37,7）に対し軒厚（5,0）が薄く背高（23,5）が高くなって急な斜角となっている。そのため13c代まで遡ることはできないが、14c前半から半ば（鎌倉末～南北朝前期）にかけての建塔として許されるもので、現段階で奈留島最古の石塔と考えられる。

問題はその石材で、安山岩の可能性が高いと思われるが凝灰岩とも考えられ、ここでの判断は控えておく。今後、岩石学専門の研究者に調査していただき石材が判明すれば、その製作地がかなり絞り込まれると思う。島外で製作され当地に搬入されたことは間違いないと思われるが、現状ではその製作地を特定することはできない。仮に安山岩製となれば、現在の佐賀県側からの搬入が一番可能性が高い。

14c前半から半ば（鎌倉末～南北朝前期）の石塔が殿口で確認されたことは、建塔地である浦湾の開発がいかに早かったかをよく示しており、海上交流上の最初の拠点であったことを示唆している。この点は、次に述べる浦向の中世石塔群や海安寺跡、泊の平家塚石塔群からも裏付けられる。



殿口五輪塔火輪



拓本画像1 種子ラ



拓本画像2 種子ラー



拓本画像3 種子ラン



拓本画像4 種子ラク

2) 浦向の中世石塔群 (図3-10)

浦湾の西側、浦向の民家裏手の岩場に祀られている。かつてはすぐ下まで海が迫ってきたと考えられる岩場で、背後は急峻な山肌が迫っている。中世石塔は、自然石を立碑にしてその前方に集積されており、種目は宝篋印塔2基分、五輪塔2基分の計4基分が確認される。立地が岩場であるため地下遺構を設置するには困難と思われる。そのため故人の遺髪等を納めた供養塔として建塔されたのかもしれない。

以下、各部材ごとに種目・石材・寸法(単位 cm)・製作時期を記すが、水輪1点は損壊が激しいため割愛する。



図 3 - 1 0 浦向の中世石塔群

(7) 種目・石材・寸法・製作時期



■宝篋印塔基礎・・・自然石立碑右側の基礎

基礎〔安山岩 横幅 29,5 背高 12,0 階段 1 段横幅 23,5 階差 3,5 階段 2 段横幅 18,6
階差 2,5 15 c 前半～半ば〕 ※底面に納入孔を彫り込む（上記画像右参照）



■宝篋印塔基礎・・・自然石立碑左側の基礎

基礎〔安山岩 横幅 26,0 背高 10,5

階段 1 段横幅 22,0 階差 2,5

階段 2 段横幅 16,5 階差 2,0

15c 前半～半ば〕

※底面は素面（納入孔なし）



■五輪塔首部付き水輪

水輪〔安山岩 横幅 23,0

背高 15,5〔首部背高除く〕

首部横幅 17,5 首部背高 2,0

16c 前半～半ば〕

(イ) 所見

右側基礎は、上端 2 段の階段を造り出し、階差も 1 段目 3,5cm、2 段目 2,5cm と十分にとっており、その彫成は見事である。また、底面には納入孔を大きく彫り込んで、遺髪等を納めていたものと思われる。このことは、当地が岩場で地下遺構の築造が困難であることから、基礎底面の納入孔に被葬者の遺髪を納めることで墓石の役割を果たしていたのかもしれない。製作時期は、15c 前半から半ばころと考えられる。

左側基礎は、現在は損壊が激しいが、右側基礎同様に上端階段の階差を十分にとっており、右側基礎とほぼ同時期の 15c 前半から半ばころの建塔と考えられる。この 2 点の基礎は、右側基礎と比較して左側基礎がやや小ぶりであることから、夫妻の墓石として建塔された可能性が高いと思われる。

左側基礎の上部に据えられている安山岩製の五輪塔水輪は上端に首部を造り出したもので、近くでは主に佐賀県側で散見されるものである（註 14）。製作時期は 16c 前半から半ばころのもので、もう一つの損壊が激しい水輪もほぼ同時期の建塔であろう。

浦向石塔群は、とくに宝篋印塔 2 基分が 15c 前半ころまで遡れることから、殿口の五輪塔に次ぐ古さをもっており、浦湾を海上交易の拠点として活動した土豪の存在を裏付けている。

3) 海安寺跡の中世石塔

海安寺は、策彦周良（1501～79）が著した室町時代中期の遣明船の記録『戊子入明記』に記載があり、応仁2年（1468）に第1次遣明船に積み込まれた4万斤の硫黄のうち3千斤が海安寺で調達されたと伝えている。このことは、奈留の浦湾が日本本土からの商品の集積地でありまた積込港であったことを示唆しており、その中心となる施設が海安寺であったことを示している。現在は廃寺であるが、かつて海安寺の本尊であったという木造如来像（残欠）が泊の教永寺に合祀されている。

海安寺跡では、今回の調査で五輪塔1基分を確認しているが、今後の調査で何基分の中世石塔が認められるものと思われる。本報告では今回確認した五輪塔地輪1点についてのみ報告するが、日程関係で詳細な調査ができなかった。そのため寸法の計測ができなかったことを断っておく。

(7) 種目・石材・製作時期



■五輪塔地輪

地輪〔緑色片岩

15c末～16c前半〕

※上端1段付きの地輪

(4) 所見

海安寺は、平安期以来、対中国交易の最前線であった奈留島の中核施設としてあったことが想定される古刹である。とくに日明貿易においては海安寺自体が日本本土からの商品の集積地であり、また浦湾が積込港として活発に機能していたことを考えれば、まだまだ古式中世石塔が多数出てきても何ら不思議ではない。現段階では地輪の1点のみしか確認していないが、今後より詳細な調査をしていけば貿易陶磁器をはじめとする中国請来の遺品も確認されてくるものと思われる。

4) 泊の平家塚石塔群

泊の平家塚石塔群は教永寺向かいの高台にあり、地元では通称「どやま」と呼ばれている。『郷土奈留』によれば、「どやま」は「土山」ではなく「殿山」が訛ったものではないかとしている（註15）。

石塔群は、長方形に細長く築かれた積み石基壇の上に、自然石板碑が4基立ち、その前方に中世石塔がバラバラに集積されている。中世石塔は五輪塔3基分（緑色片岩製塔2基分、安山岩製塔1基分）と宝篋印塔1基分（緑色片岩製塔）が確認され、近世初期（17c初期から半ばころ）の五輪塔も1基分（安山岩製）認められる。（図3-11）

今回の調査では各部材の寸法が計測できなかったため、種目、石材、製作時期についてのみ報告する。



図3-11 泊の平家塚石塔群

(7) 種目・石材・製作時期



■五輪塔地輪

地輪〔緑色片岩 15c末～16c前半〕

※上端1段付きの地輪



■五輪塔火輪（一番下の火輪）

火輪〔緑色片岩 16c前半～半ば〕



■五輪塔火輪（真ん中の火輪）

火輪〔緑色片岩 16c前半～半ば〕



■宝篋印塔塔身（最上部の塔身）

塔身〔緑色片岩 16c前半～半ば〕



■宝篋印塔

塔身〔一番下 安山岩 16c後半〕

相輪〔最上部 安山岩 16c後半〕

※真ん中の火輪は、17c前～半ばの有
耳五輪

塔火輪（安山岩）



■五輪塔

風空輪〔安山岩 16c後半〕

(イ) 所見

泊の平家塚で確認される中世石塔は、最初に緑色片岩製の五輪塔（2基分）と宝篋印塔（1基分）が16c前半に建塔され、16c後半から17cになると佐賀型の安山岩製塔（五輪塔2基分、宝篋印塔1基分）に変化している（註16）。ここで確認される中世石塔の造立者も、浦湾がもつ海上交易の拠点としての機能にその経済的背景があったものと思われる。

奈留島の石塔群とその特性

今回の調査では、日程の都合上、大串湾の寺屋敷石塔群を中心に浦湾の殿口、浦向、海安寺跡、泊の平家塚石塔群などを対象にした。そのため奈留島の全容を把握したとは言い難いが、ここでは今回の調査で得たデータから寺屋敷石塔群及び奈留島の特性を、五島（日島とその周辺）・平戸・対馬における中世石塔の建塔年代と比較して位置付けてみたい。

〔資料〕「紀年銘・形態による主な建塔年代分類表」は、各対象地で確認される中世石塔の建塔時期を時代ごとに示したものである（註17）。この分類表から、各対象地にいつ頃から石塔が建塔され石塔を建塔できる有力者が存在し開発が進んだか、また石材や形式から石塔はどこから搬入されたか、またそこから想定される具体的な搬入ルートはどのような航路なのかなどを読み取っていく。

そこで最初に奈留島全体の傾向を見てみると、他の五島日島とその周辺や平戸島と同じく14c前半から半ば（鎌倉末～南北朝前期）ころから建塔が始まり、16c後半までほぼ同じ建塔状況が認められる。西彼杵半島産の緑色片岩製塔の建塔も、日島がやや早い、他の島々同様にほぼ16c前半ころから建塔されている（註18）。

また、14c前半から半ばの殿口五輪塔や次に登場する15c前半～半ばころの浦向宝篋印塔は、その石材（安山岩）や形態から考えて、おそらく現在の佐賀方面から搬入された可能性が高く、五島日島や平戸島とは異質である。15c半ば以降に登場する緑色片岩製塔は西彼杵半島産であり、五島日島や平戸島とはほぼ同じ傾向が読み取れる。

ただ、最大の相違点は、現在までに確認している奈留島全島での中世石塔の基数が五輪塔13基分、宝篋印塔8基分の計21基分と極めて少ないことである。この21基分という基数は、五島日島や平戸島、県本土部などでいえば一遺跡分ぐらいの基数に過ぎない。平安期以降日本の対中国貿易の最前線となっていた奈留島であれば、本来ならばまだ多くの石塔が建塔されていたとしてもおかしくない。

今後の調査で基数は増えてくるのかもしれないが、奈留島のもつ豊かな歴史性からいえば現在の基数は少ない。とくに承和9年（842）、入唐を目指した恵運らの船主である唐商・李処人が奈留島で新船を建造するなど、当時の奈留島には有能な造船技術者がいた島であり、対大陸航路の重要な中継港であった。また策彦周良（1501～79）の『戊子入明記』では、奈留の浦湾が日本本土からの商品の集積地でありまた積込港であったことが示唆されており、その中心施設が海安寺であったと思われる。

これらのことを考えれば、殿口の五輪塔よりもまだ古式の好塔が多く確認されてくるのではないと思われる。今後の調査成果に期待したい。

〔大串の寺屋敷石塔群とその特性〕

奈留島で比較的まとまって集中建塔されている遺構が大串の寺屋敷石塔群である。五輪塔5基分、宝篋印塔5基分の計10基分が確認され、その基数は奈留島全体21基分の約半数を占める。寺屋敷石塔群の所見でも述べたが、当石塔群は15c後半から16c前半にかけての安山岩製塔（五輪塔1基分、宝篋印塔1基分）の建塔から始まり、16c前半期の宝篋印塔1基

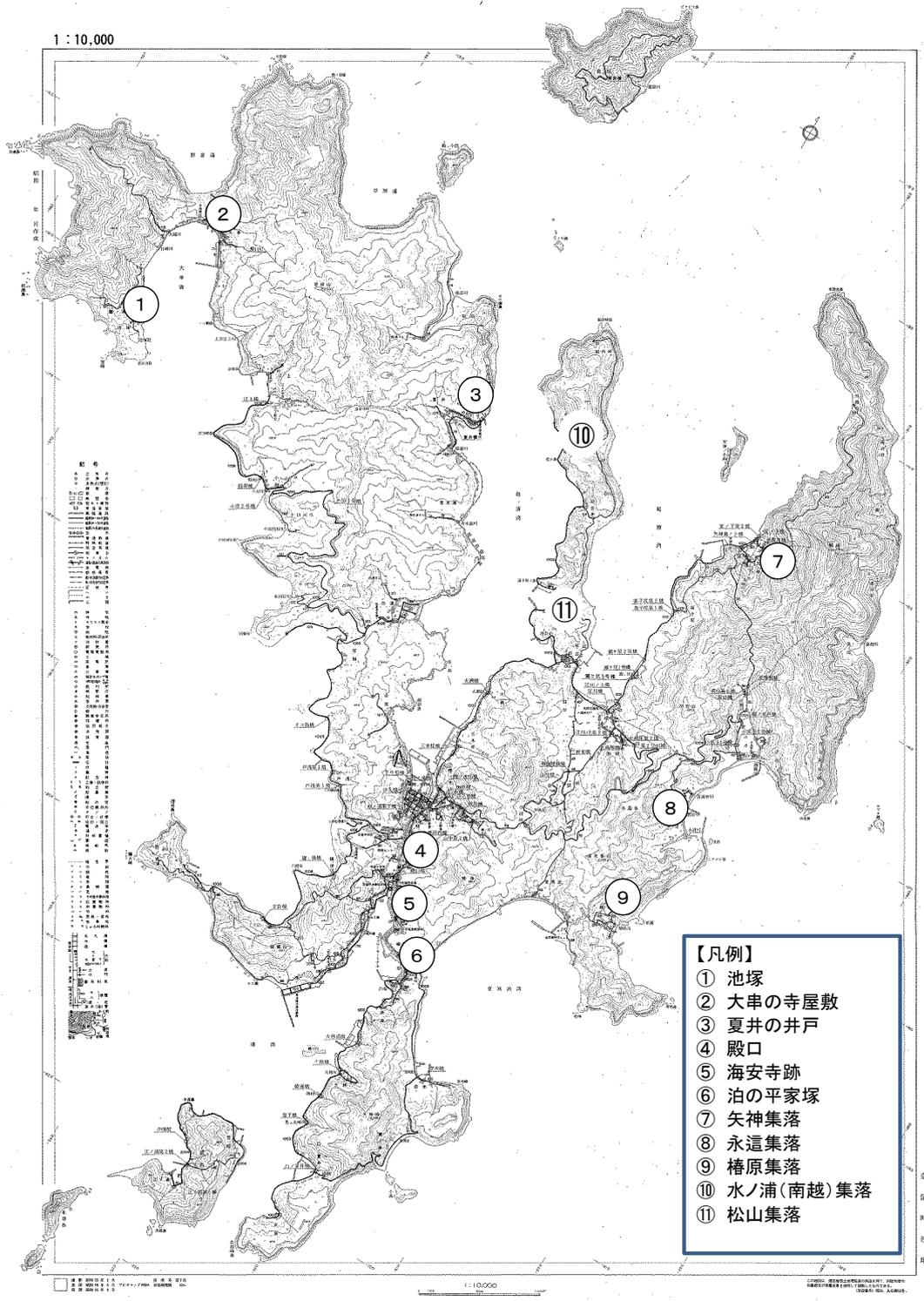
分、続いて16c前半から半ばまで続く。最初の15c後半から16c前半に想定される石塔群はおそらく大串湾を基点にした最初の勢力者（在地土豪）に関わる墓塔と想定されるが、16c半ばまですべて安山岩製であり、その石材及び形態上の特徴から佐賀型と呼ばれるものである。この点から、大串湾を拠点にした初期の勢力は現在の佐賀県側と深い関係があったことが示唆されている。また、15c後半から16c半ばまでの安山岩製塔はその建塔種目が宝篋印塔2基分に対し五輪塔が3基分となっており、ほぼ半々とはいえ、傾向としては五輪塔を軸に建塔されていることがわかる。

ただ16c前半から後半にかけてみると、これまでの安山岩製塔と重複しながら緑色片岩製塔が建塔されてくる。16c前半から半ばにかけては安山岩製塔と緑色片岩製塔が重複しながらも、16c半ば以降は緑色片岩製塔に変化し、しかも建塔種目の主体も五輪塔（1基分）から宝篋印塔（5基分）に変化している。このことは、16c前半から半ばにかけて建塔した勢力者に何らかの変化が起こっていたことを示唆している。

ところで、中世石塔からみた奈留島の開発は、殿口五輪塔や浦向宝篋印塔などからみて最初に浦湾での開発が進展し、15c後半以降になると寺屋敷石塔群を有する大串湾にその力点が移ったように思われる。浦湾の泊平家塚や海安寺塔などにも在地土豪の存在が認められるが、中世石塔の基数などから考えると、浦湾よりもより勢力をもった土豪の存在が大串湾の寺屋敷石塔群では認められる。そういう意味で寺屋敷石塔群は15c前半以降の大串湾を拠点にした有力な在地土豪の存在を示しており、浦湾に匹敵する海上交易の繁栄を築いたものと想定される。

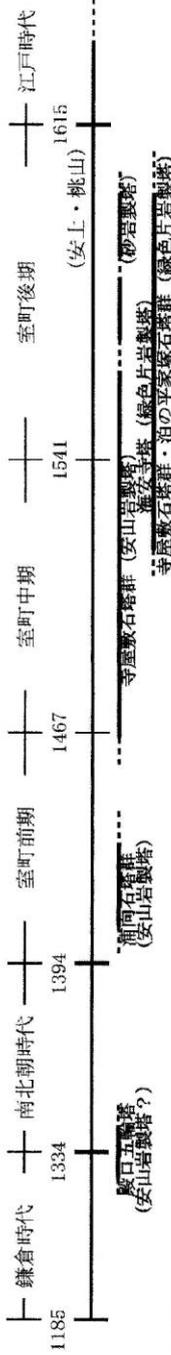
なお、相ノ浦湾や船廻湾などの周辺も調査したが中世石塔を確認することはできなかった。今後は浦湾や大串湾以外の湾周辺の調査を実施し、中世・奈留島の様相を明らかにしていきたいと思う。とくに『成宗実録』に見える奈留繁など奈留氏の動向は留意すべき事項であり、今後の調査でその実態が解明されてくることを期待する。

奈留島全島図(調査位置図)

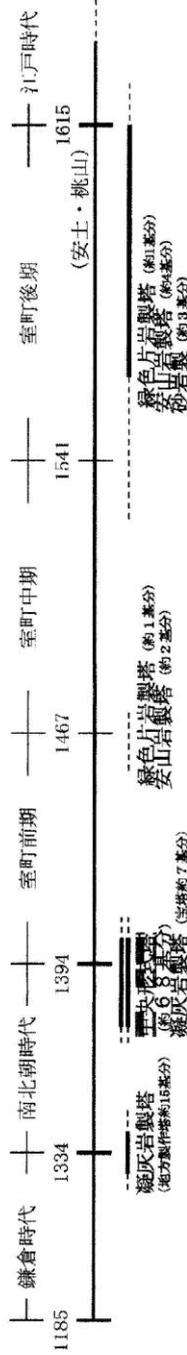


【資料】 紀年銘・形態による主な建塔年代分類表

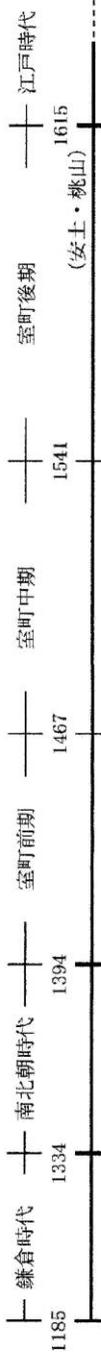
(奈留島)



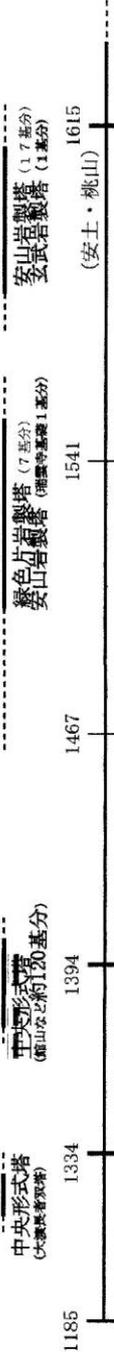
(五島日島とその周辺)



(平戸島)



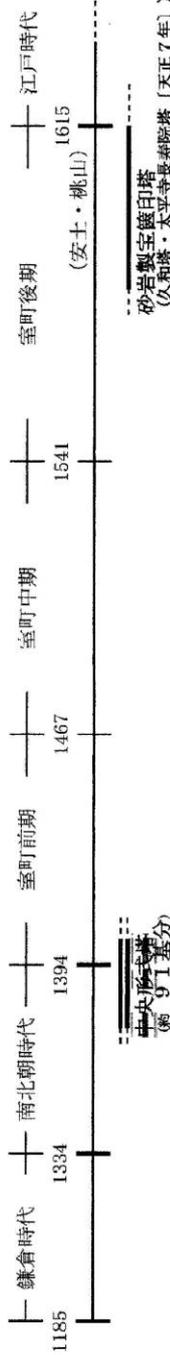
【北部地区】



【南部地区】



(対馬)



砂岩製宝篋印塔
 (久和様・太平寺長寿院塔 (天正7年))
 (など) 形塔1基上欄目点數1.9点)
 赤山岩製塔形寶篋印塔(大觀寺塔など欄目点數4点)
 清光寺一基塔(天正14年銘)

【補註】

- 註1 大石一久「中世・石造物にみられる石造文化圏の問題について」
（『松浦党研究』第22号1999年）参照。
- 註2 例外として、佐賀県多久市皇塔石塔群がある。形態から14世紀まで溯る石塔群であるが、その彫出内容は明らかに九州型である。ただ、この石塔群の重要性は、その石材が砂岩製であるところにある。
- 註3 長崎県（西彼杵半島）以外に緑色片岩を石材として使用している地域は、板碑（整形板碑）で有名な秩父地方（埼玉県）や和歌山県の紀伊川沿い、四国・吉野川沿い、それに山口県宇部市（請川地区）がある。滑石製の石塔製作地としては福岡県糟屋郡などがある。
- 註4 大石・西野「湯野田太子堂類型板碑（二基）」（2012年『日本石造物辞典』吉川弘文館）参照。
- 註5 佐賀県多久市の「公石塔群」は、古くは鎌倉後半～南北朝まで遡れ、しかも石材が砂岩製である。この点は、九州における中世・石造物のあり方を研究する上で非常に示唆的であり、貴重な遺品群である。
- 註6 大石一久「石造文化と異質石塔」（石造物研究会第4回研究会資料『海をこえての交流—石造物から中世社会を探る』2003）、「石造物からみた中世・大村の様相と仏教文化」（平成26年『新編大村市史』所収）など参照。
- 註7 自性院塔については、斎木勝「東京の宝篋印塔」（『歴史考古学』第12号1983）参照。銘文は、基礎側面に「悦堂／永享／七乙卯／三十九」（永享七年三月十九日）と陰刻されている。総高96cm。
- 註8 大石一久「地方における中世石塔造立階層の問題について」（『史迹と美術』第572号1987）参照。
- 註9 熊野修験の伝播に関しては中野幡能「英彦山と九州の修験道」、波佐場義隆「背振山修験の歴史と宗教活動」（『山岳宗教史研究叢書13』、1982年、名著出版）参照。
- 註10 鎌倉後期の石塔と元寇との関係については、拙著「霊山と大型石塔—とくに雲仙山系に見られる鎌倉後期大型石塔の建塔背景について」（日本山岳修験学会『山岳修験』第30号、2002年）、拙著「石造文化にみる異国降伏の信仰とその影響」（平成26年『新編大村市史』所収）など参照。
- 註11 豊田武『宗教制度史』（豊田武著作集第5巻、吉川弘文館1982）116頁参照。
- 註12 九州全域において最も早く一般庶民層が造立に参加していると考えられるものに、南北朝康永三年（1344）銘の福岡市水茶屋・自然石塔婆がある（川勝政太郎「中世における石塔造立階級の研究」〔『大手前女子大学論集』第4号〕参照）。
- 註13 長崎県内の中世石塔で西彼杵半島産の緑色片岩製塔は、島原半島、対馬、壱岐を除く全県下で建塔されている（前掲書「中世・石造物にみられる石造文化圏の問題について」参照）。

- 註 14 安山岩製の首部付き水輪で主な遺品は、白野五輪塔（佐賀県伊万里市）や筒口山下五輪塔（佐賀県鹿島市）などがある。
- 註 15 平成 4 年改訂版『郷土奈留』（奈留町教育委員会 平成 4 年）参照
- 註 16 西彼杵半島産の緑色片岩製塔は、16c に入ると石材供給が乏しくなると同時に、天正期に大村純忠によってキリシタン化されるため仏教関係の石塔は製作中止になる。そのため、16c 後半になると佐賀型の安山岩製塔が流入し建塔されてくるようになる。（前掲書「中世・石造物にみられる石造文化圏の問題について」など参照）。
- 註 17 [資料]「紀年銘・形態による主な建塔年代分類表」の中で、五島日島とその周辺、平戸島、対馬の分類表に出てくる中央形式塔とは、若狭湾に面した福井県高浜町日引で製作された日引石塔と、兵庫県御影の花崗岩（御影石）を石材にした花崗岩製塔をさし、日引石塔は日本海ルートで、花崗岩製塔は瀬戸内ルートで搬入されたと考えられ、中世における広範な海上ネットワークの一端が示唆されている。中央形式塔（日引石塔、花崗岩製塔）については、大石一久「日引石塔に関する一考察 ― とくに長崎県下の分布状況から見た大量搬入の背景について」（石造物研究会会誌『日引』創刊号 2001）、拙著「平戸の中世・石造美術」（『平戸市史』自然考古編 平戸市史編さん委員会 1995）、大石一久「日島の中世・石造美術」（『日島曲古墓群発掘調査報告書』若松町教育委員会 1996）、大石一久「対馬の中世・石造美術（その一、その二）」（『対馬の自然と文化』1989、1990）など参照。
- 註 18 対馬の建塔は極めて特殊で、対馬では仏塔である石塔を建塔する環境がもともと希薄だったのではないかと考えている（大石一久「石塔類から見た中世・対馬の様相」〔佐伯弘次編『中世の対馬ーヒト・モノ・文化の描き出す日朝交流史』勉誠出版 2014 年〕参照）。